

493.7-Su39ㄅ

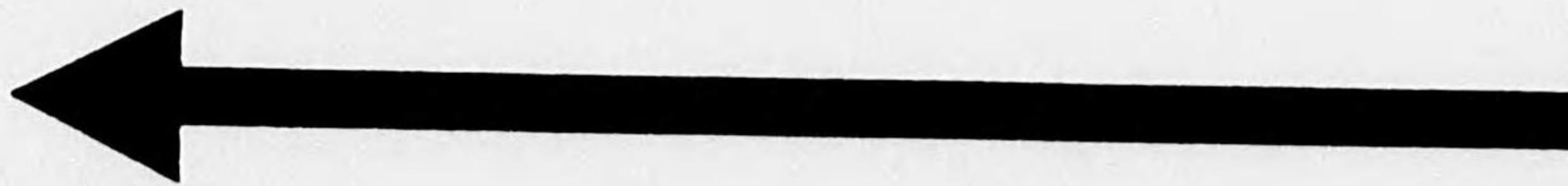


1200500743991

493.7
u39



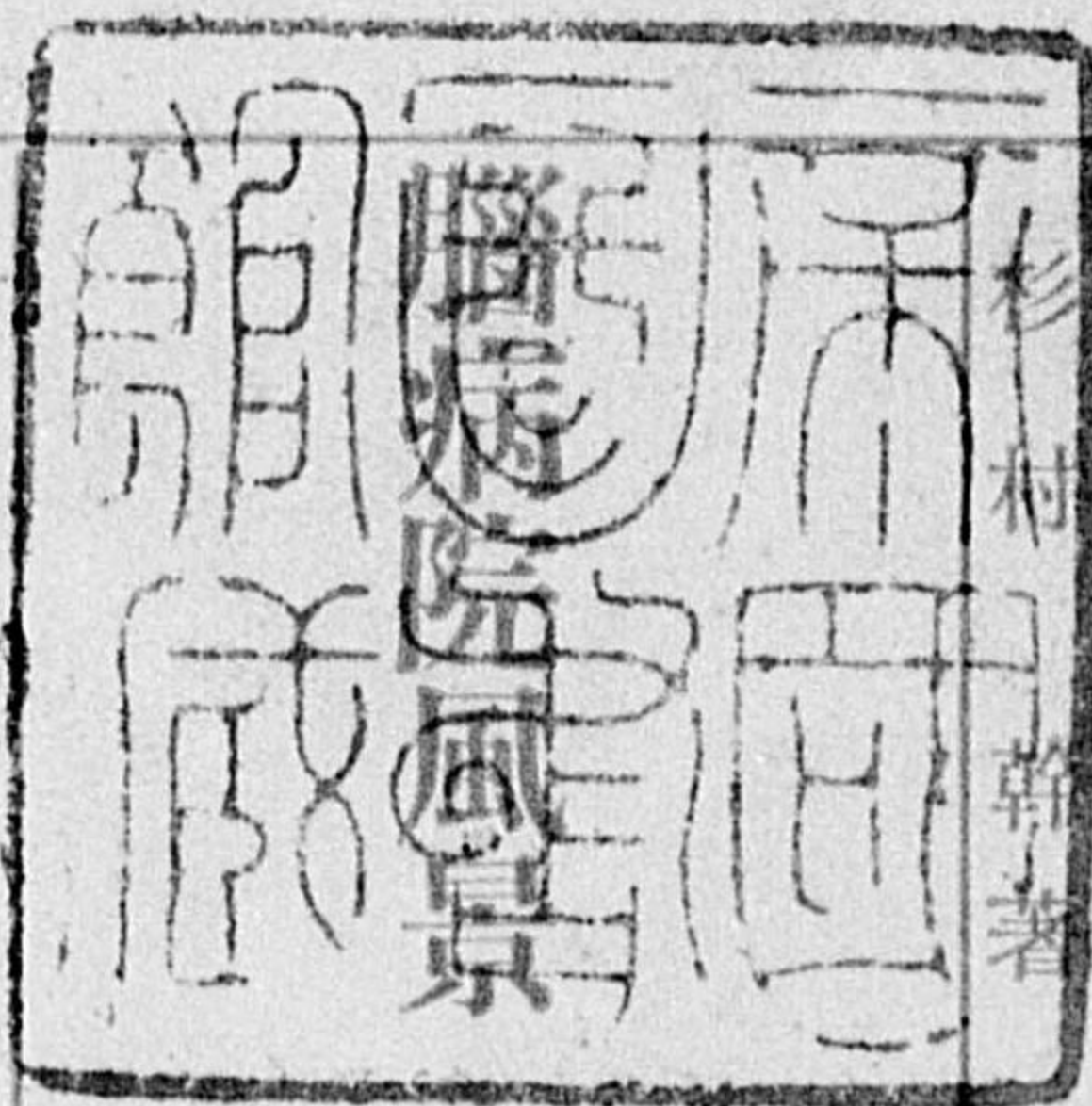
始



1-3826

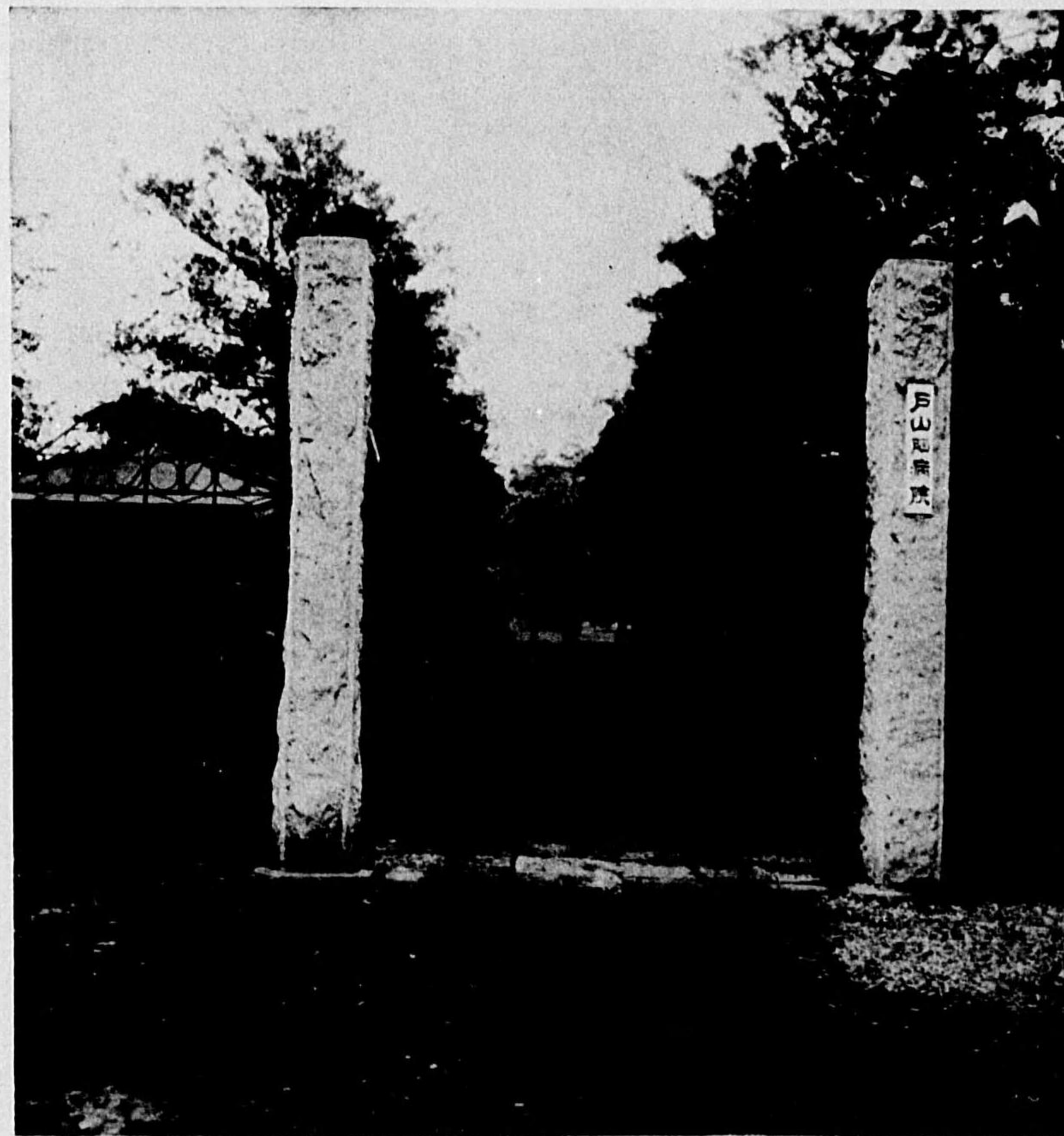
~~1-439~~

493.7
Su39

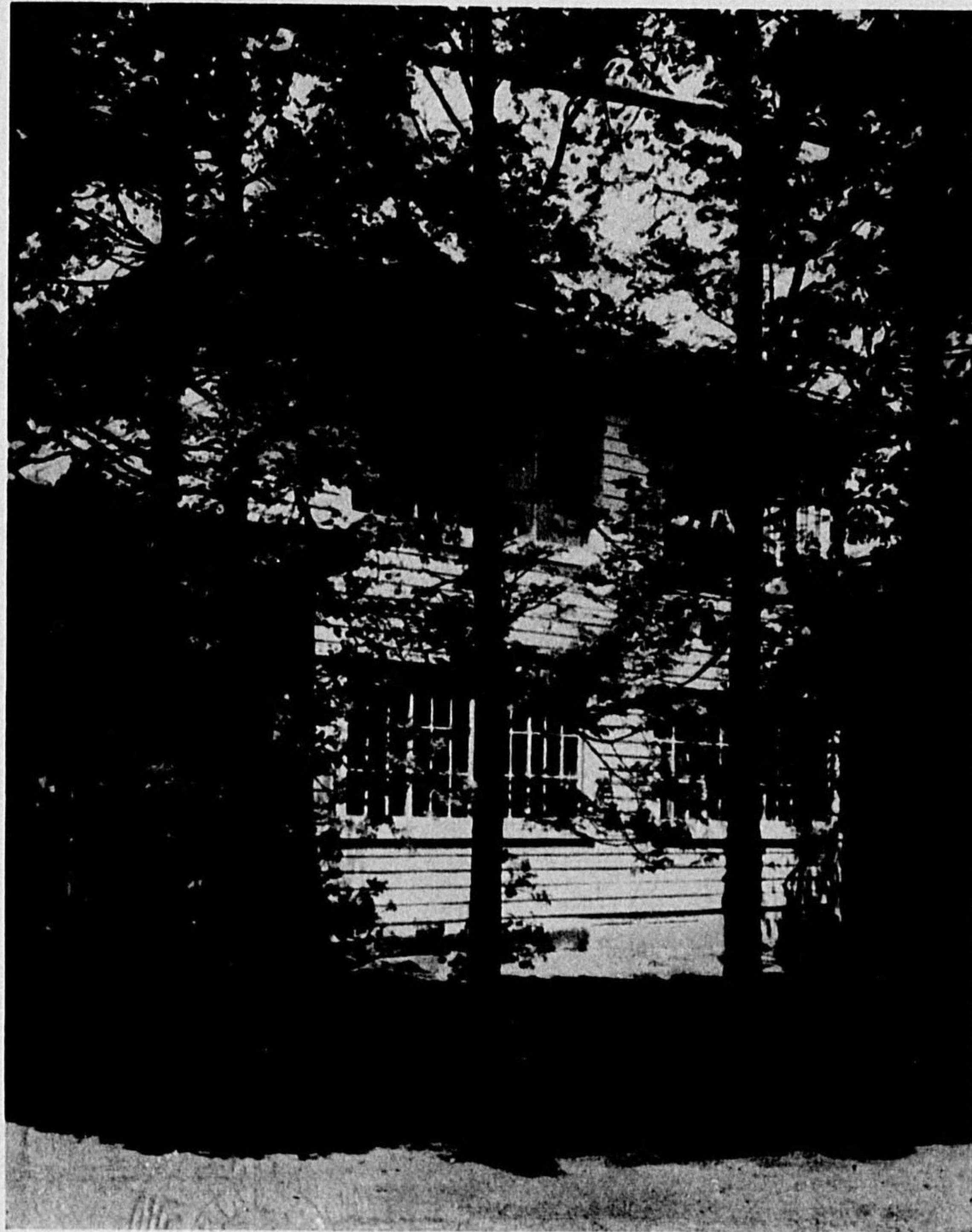


北斗書房版





戸山正院門



部一の棟病院病腦山戸



著者と家族

~~53~~
~~134~~

序

著者杉村君、明治四十二年、東京帝國大學法科大學の業を卒へ、職を警視廳に奉ぜり。予時に同廳第一部長たり。依て君と識れり。君幾くもなく官を辭し箕裘を繼ぎ、城北牛込に戸山腦病院を經營し、拮据多年、頗此業に通ずるものあり。頃者、其半生の體驗に基き、目堵する處を叙して、腦病院風景と題し、之れを世に問へり。由來精神病は文明病の稱あり。精神病者の發生は、文化の發達と相比例すと聞く。精神病院の事、等閑に付す可からざるなり。思ふに、此書の意義は、經營者自らが、其體驗を語りたる處にあらむ。從て醫師にあらざる經營者の一家言として、又自ら耳を傾くるに足るものある可し。世人此書

を讀で精神病院に對する謬見を去り、正確なる認識を與ふるに至らば、獨著者の喜のみに非るなり。書成るに及び、君子に序を求む。舊誼辭す可からず。敢て一言を卷首に題す。

昭和丁丑三月

太田政弘

序

著者杉村幹君は、同窓の友人にして、此度脳病院風景を著はして世に問はる、私は衷心から此書を歓迎する。

それは、世人から觀て謎の世界である脳病院の真相を、多年の經營者として體驗の豊富な君自らが筆を執るに至つたからである。

かくして此書は、脳病院に對する世人の謎を解く鍵の役目となることを信じて疑はぬ。讀者は此書を通して、何物か未聞の世界に就て、教へられる所があるであらう。

私は敢て此書を江湖にお薦めする。

昭和十二年三月

丸山鶴吉

緒言

亡父正謙が牛込區若松町に戸山脳病院を創設したのは、明治三十二年一月二十七日の事である。大正三年に此事業を繼承した私は、昭和二年十月三十日に至つて、更に之れを東京醫學専門學校に譲渡した。敷地二千七百二十三坪二合、建坪八百八十七坪九合一勺、入院患者數三百五十人、従業員約一百人であつた。而してその間、大正九年二月二十日には、精神病院法（大正八年三月法律第二十五號）第七條に依り、内務大臣より東京府代用精神病院に指定せられた。

思ふに脳病院（精神病院）は、人生葛藤の縮圖である。而して之れを世人の眼より觀れば、獵奇の世界であり、疑惑の世界であり、未知の世界であり謎の世界である。

小著は、私が精神病院經營者としての所産である。言はゞ當年の回顧録であり、記念塔であるに過ぎぬ。必しも狂人の群像を完全に描き得たりとは言はぬ。添ゆるに平山蘆

江君の病院參觀記を以てした。

讀者若し小著に依つて、脳病院の眞髓が果して那邊にあるかを、隱約の間に會得せらるゝならば、私の望みは則ち足る。

私は此機會に於て、歴代の院長、久保悅藏、醫學士森繁吉、故醫學博士橋健行、醫學博士兒玉昌、醫學士谷口本事、醫學博士加藤普佐次郎、主事高橋義信の七氏、及病院發展の爲めに機宜の助力を與へられし、故山根正次、故江間俊一、故山口弘達、故湯地幸平、坪谷善四郎、兼子悌次の六氏に、特に深厚なる感謝の意をさしげる。

猶小著の卷頭に、太田前警視總監、丸山前警視總監の高序を賜はりたることを、限りもなくありがたい事におもふ。

昭和丁丑三月

城南の儉閑養癡處に於て

杉村 幹

腦病院風景 目次

陽氣につれて……………一

監禁主義から自由主義へ……………三

早發性癡呆……………九

痲痺性癡呆……………一五

塹壕性狂人……………二〇

直訴狂……………二四

色情狂……………二九

誇大妄想狂……………三三

放火狂の少年……………三九

癲癇……………四三

妄想百態……………四六

憑依妄想	四八
蘆原將軍	五〇
狂人の手記	五五
封筒を貼る	六〇
患者と食事	六三
萬物は蛇	六五
狂人検事を斬る	七一
狂人巡査を斬る	七六
狂人の悟道	七九
オヂヤのかたまり	八一
島の王	八二
陰囊苦	八四
壁虎となりて	八五

患者相搏つ	八七
アテック・フィロソファ	八九
患者の逃走	九一
豆ばかり	九六
狂人は斯く訴ふ	九七
見舞による衝動	一〇三
地下の黄金	一〇六
深夜の自動車	一一二
病室の書畫幅	一一八
自制する患者	一二一
酒鬼	一二七
松問答	一三六
患者劇	一四〇

假装行列	142
忘れ得ぬ患者	147
街頭の噂	153
その夜の松崎天民	159
翠丸有柄移植事件	166
戦争と精神病	171
精神病院の火事	174
殺人未遂の共犯として訴へられた私の経験	179
おそろしい顔の晝	190
森國手のこと	198
橋健行博士のこと	200
入院料夜話	205
乙艦ヶ濱の美石	210

看護人の要求、罷業、争議	223
精神病院と看護人	228
精神病院とジャーナリズム	230
公費患者は国立病院に	233
病院の經營を罷むる歌	245

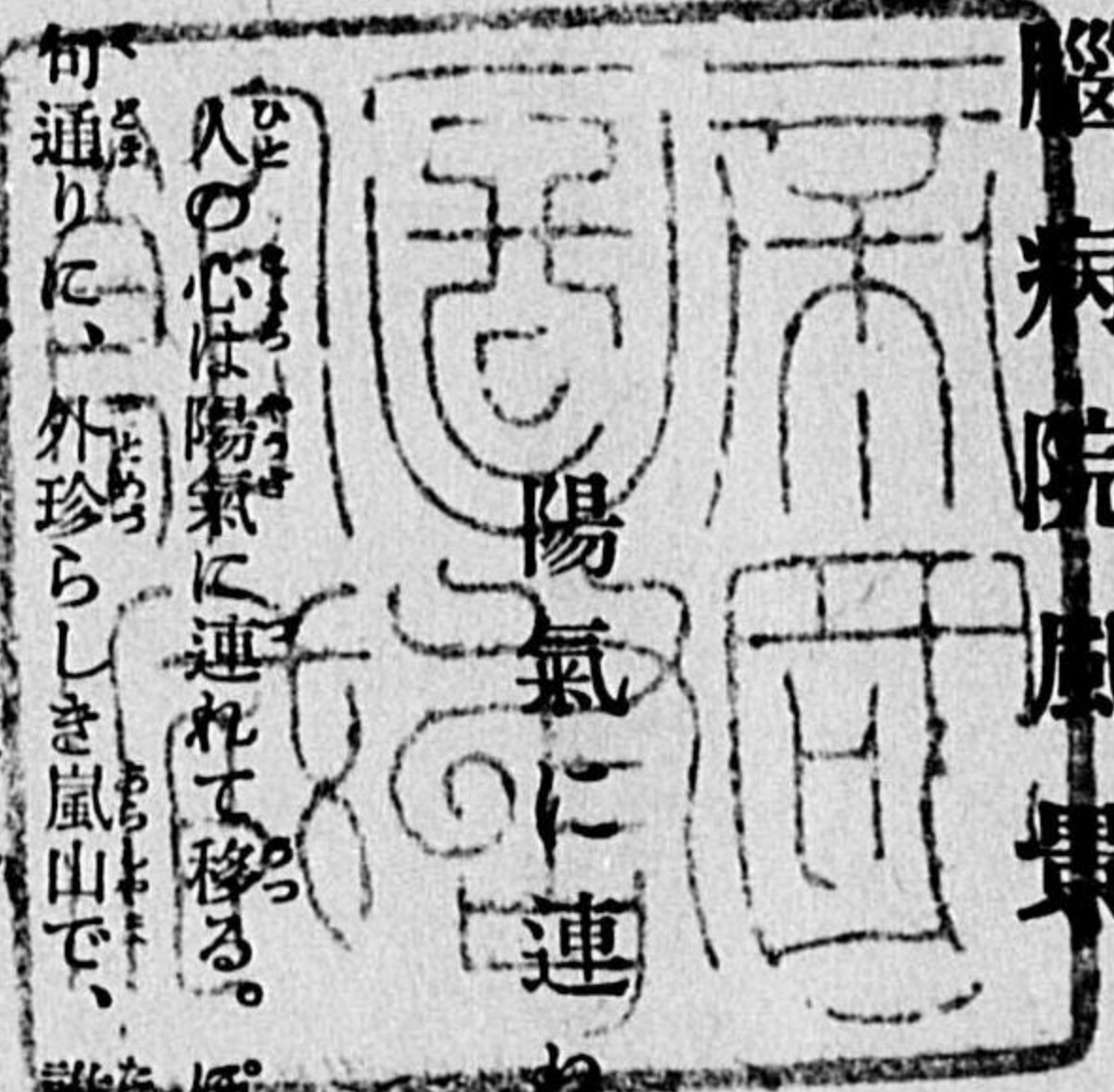
x x x

戸山脳病院參觀記(平山蘆江)	251
精神病院に關する法令	255
公立精神病院及私立代用精神病院	257

参考 精神病名 (精神病を細別すると、次のやうな病名になる。)

癲癇性精神病	躁病	回期性精神病	鬱病	抑鬱状態	發揚状態	躁鬱病	偏執病	變質性	癡愚	白癡	早發性癡呆
											破瓜性癡呆
											緊張性癡呆
											妄想性癡呆
											麻痺性癡呆
											老耄性癡呆
											中酒性精神病
											其他ノ中毒性精神病
											虛脱性精神病
											熱性傳染病性精神病

腦病院風景



陽氣に連れて

人の心は陽氣に連れて移る。ぼかくと櫻の花が咲く彌生の頃ともなれば、嵯峨やお室の文句通りに、外珍らしき嵐山で、誰でも室内にデットして居られない気分になる。さうかと思へば、じめくと五月雨の降りつゞく頃には、どんな人でも鬱陶しさを感ずる。矢田挿雲の創作忠臣蔵のなかに、浅野内匠頭が入梅の時季に入ると、如何に抑へようとしても、自分のイライラする気分を抑へる事が出来なかつたと書いた一節があつた。天高く馬肥ゆる秋の日は、人の

心も眞澄の空と冴えてゆくだらう。が併し、秋深し憐は何をする人ぞといふやうな蕭殺閑寂の風物ともなれば、そこに胸の痛みを覚える人の無いでもあるまい。

此原理から推論すると、四季の風物の變遷が影響して、精神病の發生するのは當然の事だ。

私の病院でも、草の芽の生える春さきから、つゞいて新緑のころ、それから猛暑、かうした時節に一番入院率が多かつた。

目に青葉、山郭公、初松魚、木々の緑の美しい頃から、黒鐵も眞鐵も溶かす眞夏にかけては、發作的に人の精神が錯亂する。その結果、自殺者がふえる。事業の失敗とか、失業苦などに悩み抜いて、さて世の中がイヤになつて、自殺をする者が出て、盛に新聞の三面を賑はす。その中には、自分一人が死ぬばかりでなく、罪もない妻や、可憐な子供を死出の道伴れにする所謂兩殺性の者さへある。

私はかうした三面記事を読む毎に、あゝ又例の年中行事かと、眉を擧めるのが常であつた。或學者の説によると、かういふのは一時の衝動から來るもので、たとへば前に言つたやう

に事業に失敗してつく／＼世の中がイヤになつてゐる處へ、陽氣の加減で頭の調子が變になる。言葉をかへて言へば、事業の失敗で弱氣になつてゐる處へ、時候の變化が影響を與へて、その人を死に誘ふ。

かうした順序であると云ふ。

併しかうした死を迎へる人たちは、大抵は精神病の素質のある人であり、梅毒菌の所持者であり、又大酒家であつたりする場合に多い事は申すまでもない。

畢竟かうした内因が、外部の誘引によつて曝發したに過ぎぬ。

監禁主義から自由主義へ

私の病院にこんな患者があつた。

それは信州のある山里で、精神病者を入院させたいから迎ひに來てくれといふので、事務員

と看護人とが迎ひに行つたが、歸つて來ての話によると、山添ひの農家の納屋の裏に、一文位の深さの穴を堀り、その中に患者を入れて、穴の上には金網を張り、三度の食事は、握り飯をその穴の中へ抛つてやるのであつたと云ふ。言はゞ體のいい生理めである。

この患者は穴居生活實に十年の長きに及んで、病院に連れて來た時は、手足の爪はキレイに無くなつて居た。凍傷のためにさうなつたものだと言ふ。十年穴居の習性は鼯鼠同然の氣持になつて、採光のイ、室は、まぶしがつて目を閉ぢて居た。

信州の草深い山里に於ける穴居十年の生活、思へば慘酷を極めた話ではないか。監禁主義の極端な實例と見るべきであらう。

それに付て考へられる事は、歐洲に於ても古くは世の精神病者を見る事、恰も刑事上の罪人を見るが如くであつた。刑事犯人は社會に危害を與へ、公共の安寧を害する。それ故に逮捕監禁して刑事上の罰を加へる。精神病者も又刑事上の犯人と同じく、社會に危害を加へ、公共の安寧を紊だす。依てこれを監禁す可しといふ原理であつた。だから精神病者には戒具を施して

監獄に投じた。唯監禁するを以て、その目的は足れりとする。病氣の看護治療といふが如きは全く視野の外にあつた。風馬牛相關せずであつた。

歐洲に於ては、千七百年代に至つて、先づ英國に於て、精神病者の監禁主義に對する反對の第一聲が起つた。それは言ふまでもなく、人道主義の見地から出發したのであつた。

英國に起つた人道主義の烽火は、遂に他國に及び、さうした精神病者を刑事犯人と同視するを非とし、絶對の束縛、絶對の拘禁をやめて、一定の制限の下に、自由に放任するといふ風潮になつて來た。千七百九十二年、佛國のピネル氏は、巴里のピセートル病院に於て、鐵鎖撤廢に着手し、不拘束主義 (Non-Restraint-System) を實行し、尋で千八百三十九年、英國のコンリー氏が、ハンウエル病院に於て、強制器具の使用を禁ずるに及んで、ここに精神病者待遇の上、一エボツクを作り、今日に於ては無隔離療方、村落療方、家族療方等の實施を見るに至り、精神病者に取りての大なる福音を與へた。

昔精神病者を業病と見做し、又は妖魔の所爲と考へての迷信から出發して、遂にこれを刑

事犯人と同視し、監獄に投じたといふが如きも、こゝに至つて、全く一場の夢ものがたりと化してしまつた。

我國に於ても、明治十二年、上野に公立癲狂院（今の東京府松澤病院）の創立せられた當時にありては、その病室の如きは、囚檻以上に嚴重な施設で、手錠、腰繩の如き強制要具は、患者一人々々に備へられ、殆ど廢疾に近い養育院救助人を以て看護者に當て、その地位は小使と同一視せられたと云ふ。室内の掃除、患者の入浴の如きも僅かに一週に一回に過ぎなかつたと云ふ。

要するに當事者の眼から見た患者は、三度の食事を與へさへすれば、それで足るといふだけの事で、言はゞ動物を飼養するが如きものであつた。看護とか治療とかの問題は、全然その眼中に無かつたのである。

この頃松澤病院で亡くなつた誇大妄想狂のレコードホルダーたる蘆原將軍は、かうした公立癲狂院以來、五十何年間の長い一在院生活者である。狂人彼の如きと雖も、そこに自ら會得

する何物かあるべし。當年の患者待遇法と今日のそれとを比較すれば、蓋し隔世の感がその胸中に徂徠したのであらう。

精神病院が治療の目的でなく、單に監禁收容の場所に過ぎなかつた事は、およそ上述の通りである。然るに今日の精神病院に對しても、今猶さうした僻見の持主が跡を絶たぬ。新聞雑誌の記者などにも、そんな風に考へて居る人が相當にある。彼等は能く私に向つて、

「精神病院なんてポロイ儲けをするもんださうぢやありませんか。丸儲けでせう。薬は要らないし、水さへ飲ませておけばイ、んだから。」

所謂盲蛇の亞流で、臆面もなく、途方もない大ヨタを飛ばすのであつた。

かうした愚問に對しては、私は何時も啞然として答ふる處を知らなかつた。そこで私は、薬局から藥品購入決裁簿を取寄せて、それを彼等に示したものだ。すると今度は逆に彼等が啞然として、

「へエこんなに薬が要りますかね。」

と目を白黒させるのであつた。

彼等が私に向つて、水ばかり飲ませるんでせうと馬鹿氣た問ひを發した時に、私は敢へて辯解釋明の勇氣さへ出なかつた事がある。併し一步退いて考へて見ると、假りにも社會の木鐸と言はれる人達に、かうした誤つた考へを持たせて置くのは、自他共に不利益な事ではあるまいかとの結論に達した。そこで私は藥品購入決裁簿を彼等の前に公開して、生きた證據を示したのであつた。

單に新聞雜誌の記者ばかりでなく、直接に病院を監督する東京府の役人などにも、水ばかり飲ませて居るんぢやないかと言つて、物議を醸した人があつたと聞て居る。

今日の學界では、或種の精神病は、治療に依つて快復するといふ事が定説になつて居る。獨逸の或聯邦では、發生後六ヶ月以内に精神病院に入院させたものには、その家庭の財産の有無に拘はらず、一年間は入院料を免除する特典をさへ與へた處があつたと云ふ。

早發性癡呆

私の病院には、早發性癡呆の患者が非常に多かつた。中には高等學校や、慶應大學の學生などに、さうしたのがあつて、ひどく惻隱の精にうたれた。

早發性癡呆は、およそ二十歳前後から、三十歳頃までの間に發病するのを常とする。從て之からが人生の盛りだといふ處を、一夜の嵐にポツキリと折られて仕舞ふのだ。

早發性癡呆の原因は何か。

學説はいろいろに分れて居る。内分泌異常説、腸の自家中毒説、肝臟機能障害説などがそれである。そして何れにしても、精神病の遺傳的素因のある人に起る慢性的疾患だといはれて居る。

其症狀は、智的方面に於て、幻覺と妄想とを起し、意志方面に於て、昏迷、興奮の状態と

なり、最後には全精神の荒廢を來すものだといふ。

學者の説に依ると、此患者に對しては、從來ホルモン療法、自家血清療法、肝臟食療法、重金屬療法、硫黃療法等、幾多の療法が行はれたが、何れも大した効果を發生しなかつたといふ。併しウイン大學教授ザーケル發明の高量インシュリン療法だけは、發病後未だ長日月を経過しない患者に對しては、相當の効果があつたとの事であつた。

私は、春の海の如き洋々たる前途を持てる、若木の人達をむしばむ早發性癡呆を呪ふ。

早發性癡呆の名は躁鬱病の名と共に、博士吳秀三が、クレペリン學派を祖述して日本に紹介したのであつた。

X X X

早發性癡呆の多い事は、實に驚くべきばかりである。かうした患者が、今後此勢で簇出する事になると、國家にとりても由々しい問題になる。

然らば、この問題を如何にするか。そこへ着眼したのは、日本民族衛生協會であつた。此協會は、各方面の權威を集めて、斷種法を研究する事ここに三年、愈その草案の脱稿を見、今期の議會に提出する運びになつたと云ふ。

尤もこれは、獨早發性癡呆のみを主眼としたものではない。併し早發性癡呆が、その主なるものの一つに數へてあるので、私は此事を此章に付け加へた。

而して、その條文の草案は、左の十三條より成立つて居る。

第一條 本法は精神薄弱者、癲癇者、精神乖離症者（いはゆる早發性癡呆症）、躁鬱病者、強度の病的な人格者（俗にいふ變質者でアルコール中毒、ヒステリー症者、兇惡な犯罪者を含む）、盲者、聾者、又は強度なる身體的畸形者にしてこれら劣等なる素質を遺傳する虞れ顯著なる者に對し斷種を行ふことを以て目的とす

第二條 前條に掲ぐる斷種とは男子に對しては輸精管を切斷し女子に對しては輸卵管を切斷する手術を謂ふ

第三條 斷種は本人の申請に基き又は左に掲ぐる者の中より申請ありたる場合に限りこれを行ふことを得

1 戸主

2 法定代理人又は保佐人

3 官公立の精神病院監獄矯正院又は教護院の長

第四條 前條の申請は命令の定むる所により之を地方官に申報する事を要す

第五條 前條各號に掲ぐる者の申請には本人の同意を要す但本人意思能力なき時は其の配偶者、法定代理人又は保佐人の同意を以て足る

第六條 斷種の適否を判定するため斷種委員會を置く、斷種委員會は判事、檢事各々一名及び醫師二名を以て組織す

第七條 斷種委員は命令の定むるところにより内務大臣之を任命又は囑託す

第八條 地方官斷種の申請を受けたるときは速かに之を斷種委員會の議に付すべし

第九條 斷種委員は付議を受けたる日より三ヶ月以内に斷種の適否に關する協議をなしその結果を内務大臣に具申すべし

第十條 内務大臣斷種を適當とする旨の具申を受けたるときは三十日以内に斷種の手術を爲すべきことを命ずべし

第十一條 斷種の手術を爲したる醫師はその手術後三十日以内に命令の定むるところに依り手術の結果及び手術後の経過を内務大臣及び斷種委員會に報告することを要す

第十二條 斷種に關與したる者は斷種を受けたる者の住所、姓名、及び之に關する斷種の狀況に付き秘密を守る義務を有す

第十三條 前條の義務に違反したる者は六ヶ月以内の懲役又は三百圓以下の罰金に處す

斷種法を最初に制定したのは、アメリカ、インデヤナ州で、それは一九〇七年の事であつた。それから追々に他の州も之れに習つて、今日では二十八州の多きに及んで居る。その他、スイス、カナダ、デンマーク、ドイツ、メキシコ、スウェデン、ノルウエー、フィンランドの

諸國にも行はれ、殊に旺盛なる國家意識の下に行はれつゝあるのは、新興ナチス・ドイツのそれである。

今度の我國の斷種法の特徴は、本人乃至保護者の自由意思によるもので、國家が個人に斷種手術を強制するのではないといふ一點に歸する。言ふまでもなく、此手術の目的は、生殖を不可能にするだけの事で、全然性生活を奪ふといふのではない。

日本民族衛生協會の理事長、永井潛博士は、此事に關して、

「此れに反對する者は、斷種の基礎と爲つて居る遺傳學の長速の進歩發達を理解しない無智の議論だ。民族の花園を荒らす雜草は、斷種手段によつて、根こそぎに刈取り、日本民族永遠の繁榮を期すべきである。」

と語つたと傳へられる。

私は此問題に特殊の興味を感じる、一日も早く日比谷の議政壇上に於ける申論乙駁の議論を聞きたい。

痲痺性癡呆

端然と机に向つて、朝から晩まで書物を読んで居る患者、その人は××博士である。十疊敷の座敷の床の間の隅に、終日寝ころんで居るかと思ふと、急に起ち上つて、病院の長廊下を六代目の聲色をつかひながら走りまはる患者、その人は日本橋の大商人の一粒だねの倅である。金紗ヅクメで一日をキヨトンとした顔付で、天井を見詰めて居る患者、その人は世に名高き富豪の細君である。

而してこれらの患者は、皆自利失禁をする。或は本を読んで居ながら、或は床の間に寝ころんで居ながら、或は座敷の真中にすわつて居ながら自利失禁をする。自利失禁とは何か。しばらく説明の便宜の爲に、尾籠な言語を使ふことを許していただきたい。それは大小便のタレ流しといふ事である。これらの患者は、もう排便の感覚が無くなつて居るのだ。

これは痲痺性癡呆患者の特徴である。どんなエライ人でも、どんなに地位のある人でも、札束が金庫の中でうなつて居るやうな、イ、日の目の下に置かれた人でも、一度激越性の痲痺性癡呆に襲はれては、人生はおしまひだ。所謂走屍行肉である。丈夫も美女も、共に靈魂のない廢殘の形骸に過ぎぬ。

朝から晩まで、端然として讀書に耽つて居る××博士、よそ眼には、如何にも眞摯敬すべき學究に見える。併しその眼はうつろである。唯長い間の惰性で、本を手ばなす事が出来ないのだ。形の上で本を見て居るだけの事で、頭腦には何の反響も無い。金紗づくめの有閑夫人も、これと同じ事だ。魂そのものを失つた様な、間の伸びた顔付をして居る。言はばボケ茄子といふ感じである。そこに生々潑潑の表情などは、藥にしたくも見當らぬ。そして此有閑夫人は如何かすると庭に飛出して、老梅の梢を攀ち上るのであつた。そして樹上から大小便をたれ流す。有閑夫人が狂人になつて、梅の樹上から大小便をタレ流す程度のものであつたら、見方に依ては、茶氣慢とも、ユーモラスともうつるであらう。が併しもう一層病状が進んで、所謂

精神荒廢の末期になると、中々こんな事では濟まない。例へば自分の身體に、大便や經水をなすりつけて、院長さんが香水だと仰有いましたからつけましたなど、平氣の平左で言ふのがある。さうかと思ふと、自分の大便を塵紙に包んで、大事の〜赤ん坊だと言つて、此包を懐に入れたり、又は頬づりしたりするのがある。人生の悲惨此處に至つて極まる。此光景に直面した何人でも、顔を擧め面を背けないものはないであらう。落語家は張扇でオデコをたゝいて、御婦人はお色氣の源でげすと下卑た口をきく。併し姫御前のあられもない、かうした場面を見せつけられては百年の戀も一日にしてさめるであらう。

どこの精神病院でもさうであるが、私は痲痺性癡呆の餘りに多きに驚く。痲痺性癡呆は三四十代の働き盛りの年に起る。そして大抵は、發病後二三年で死んでしまふ。

痲痺性癡呆の原因は微毒である。私は花柳病が累を爲して、あたら有爲の才能を、精神病院の一室に横へて居る走屍行肉の人たちをあはれむ。私は何時でも痲痺性癡呆の發作を見る毎につくづく微毒病原菌(スピロヘータ)の恐ろしさを考へた。

私の知人で、一ころ龜井戸あたりの安藝者を買つて、悦に入つてる男があつた。私は曾てその男に向つて、

「君もイ、加減に道樂を切上げないと、狂人になるぜ」

と、警告した。その人は驚きの眼を睜つて、

「道樂をすると氣ちがひになるかね。」

と反問した。私は重ねて、

「十人が十人、きまつてなるといふ譯ぢやないよ。併したつた一度不見轉を買つたのが本で、

氣狂ひになつた人もある。論より證據、一度僕の病院に来て見たまへ。生きた標本がウヨウ

ヨ居るよ。」

と答へると、

「さうかなあ。」

と苦い顔をするのであつた。

道樂の報ひが微毒になり、それが原因と爲つて、痲痺性癡呆といふ精神病になる事を教へられ、過去の暗い行爲を振り返つて、不安焦燥の氣分になり、泥繩式にサルバルサンの五六回も注射して、もう大丈夫だと涼しい顔をして居る人があるならば、その人は、自分の體中に爆彈を抱いて、晏如として眠つて居るに等しい。

仔細を言はう。

權威ある醫師の説によれば、變成微毒たる痲痺性癡呆に對しては、サルバルサンの注射は、殆ど効果が無いと言ふ事である。

併し一九一八年になつて、ウイン大學教授ワグネルが、痲痺性癡呆に對して、マラリヤ療法なるものを發明した。これは、マラリヤの原虫を、痲痺性癡呆患者に接種して、マラリヤ病患者と爲し、その高熱を利用して、病原菌スピロヘータ・パリダを死滅せしむる非常療法であつた。一九二九年に、ワグネルが此發明の爲めに、ノーベル賞を與へられたのに徴しても、相當に學界に聲譽を博したものと云ふべきであらう。聞く處によれば、九州醫學專門學校教授の

王丸醫學博士は、ここにヒントを得て、硫黄・ワクチン重疊療法と稱する高熱療法を發明せられたとの事である。これまた學界の慶事である。

併しトルストイが喝破したように、療法發明といふ學界の福音が、有産階級の墮落を増させる反面の眞理をあらはしてはならぬ。

今の社會教育家は、口を開けば性教育を云々する。語を寄す、これ等の人々よ、「道樂は痲痺性癡呆へ」と云ふ標語でも作つて、世の青年達に警告を與へ、これを溺れぬさきに救つて貰ひ度し。

曲亭馬琴の言ひ草ではないが、色海の迷津は賢不肖無差別である。

塹壕性狂人

自然界人事界に何か不測の異變があれば、人は大なる、精神衝動を受ける。そして多くの精

神病者を出す。

大正十二年九月の大震災の時であつた。私の病院も毎日々々の入院患者で、門前市を成すの盛況であつた。

家を焼かれた者、親を失つた者、夫に離れた者、財産を失つて生活の根據を失つた者等々、或は哀別離苦、或は生くる糧の源を失つた者の嘆き、精神病者が草の芽の如く簇々と發生したのも當然の事ではないか。何れも恐怖性、疲憊性、急性錯亂等であつた。

猶此外に塹壕性精神病者と名づくべき者があつた。

塹壕性精神病者とは何か。曰く

生活の根據たる自分の家屋を失ひ、平素の生活と違つた生活をしたが爲めに起る精神病である。たとへば深川に住んでた人が、家を焼かれ、着のみ着のままで、上野の森に二夜を明かしそれから小石川傳通院の境内に三夜を明かしたといふやうなジプシイ然たるワンダー・フオゲル然たる居住の不安、衣食の不安が、かうした病を誘致するものであると云ふ。

現に歐洲大戰當時も、各國の兵士間には、塹壕生活に依ての精神病者が相當に發生したと聞く。今次の西班牙革命でも、おそらくはかうした型の狂人の發生を見た事であらう。

×

×

×

私はこんな事を考へた。

中産階級乃至はそれ以下の人で、自分の家といふものが無く、轉々として借家生活をして居る人達、時には經濟上の都合で、大家から店立てなどを食つて居る人達、さうした住宅難に悩み抜いて居る人達は、よし精神病者でなくとも、又塹壕性苦悶の體驗者といつてよからう。山岡鐵舟は、五十三年の生涯を、貧乏で苦しみ抜いた人であつた。其人に、行く先きに吾が家ありてかたつむりの一句があり、私の知人、入山雄一に、かたつむり殻をもてるが仕合せか殻をもとめてはまた移る、の一首がある。何れも、塹壕性苦悶を表現したものといつていい。

併しこれは、單に居を移すといふ形式の上から觀た話で、觀察の角度を急轉換して、更に内

容の上から検討すると、古人の言つたやうに、人の心を清新にするといふ意味で、居をかへる人があるかも知れぬ。さういふ人にとりては、居を遷すが爲の快適こそあれ、塹壕性苦悶などは爪の垢ほども無いわけだ。葛飾北齋は、此流儀の大家で、生涯のうちに九十三回の移轉をした。其中には、一日三回も其居を移したとさへ傳へられる。今の早稲田大學の某教授も、かうした意味での移轉實行者であると聞いた。

彼の樂聖ベエトヴェンも、盛んなる貸家放浪者であつたといはれる。今でもヴィンには、そこそこに彼の住んで居た家が残り居て、そとに、行客をして回顧の情を惹かせるといふ。小池秋草の隨筆の中に、

「カーレンベルヒへゆく郊へ出ると、そこにベエトヴェン道がみつかつた。槐樹の肅然と列立する野趣濃いこの舗道は、肝臟病特有の黄色い顔をして、債鬼にでも追はれたのか、ひどく興奮して、手を振り叫びつづぶやく彼の姿を、幾度か見た事であらう。この牧歌的春興が、牧羊シンフォニーとなり、カーレンベルヒ山上の風雨雷電が、英雄シンフォニーを作つたと

さへ、音楽史家は言つて居る。」

と言つて居るのを見れば、彼はドウヤラ墮壕性の苦しみが、偶彼の心を清新にした交響樂であつたと解する事が出来るであらう。

直訴狂

恐れおほい事ではあるが、精神病患者中には直訴狂といふのがある。私の病院にもさういふのがあつた。

宮内省皇后陛下と書いた書面、並びに函館要塞地帯描寫の許可證を携へて居た精神病患者が、牛込神樂坂警察署に引致され、私の病院に送られた事があつた。其男は畫家であつた。今大正六年四月二十日の東京日々新聞に掲載された當時の神樂坂署長立川太郎（今衆議院議員）の談を轉載して見ると、

「本人を取調べた所では、精神に異状があるとは思へぬが、直訴書は昨年中皇后陛下に宛て、軍艦を多數建造の趣を天皇陛下にお勧めの嘆願書を出したが、返書が無いから、更に催促の爲に認めたのだと自白してゐるが、偕其の直訴書を読んで見ると、殆ど戀人に宛たやうな内容で、全然お話にならぬ。恐らくは飲酒の場合など、突發的に異状を來すものと思ふ。北海道では、相應名を知られ、曾て精神病患者扱にされた事もなく、要塞地帯を描寫して宮中へ献上する積りだと言つて居る。」

といふ事になつて居る。

此患者は入院後も、時々雑誌などを讀みながら、

「あゝ俺れの發明した事が書いてある。」

「俺れは軍艦の機關が折り疊めるやうに發明したから、一つこれを帝國海軍で採用して貰うんだ。」

「俺れが此間皇后陛下に差上げた手紙はもう届いたかな。」

など、言つて居たさうだ。病名は發明妄想狂であつた。

又私の病院にかういふのがあつた。

或時半藏門前の往來を行き來して、頻りに宮城内を覗き込む怪しげな男があつた。麴町警察署に引致して取調べると、

「ラヂオで攝政宮殿下からお招きを受けたので出て來たのだ。」と並み居る署員を煙に巻いた。

此男は神奈川県藤澤の生れで、少年の頃、頭部を強打してから變調になり、其父が大の天理教信者なので、天理教に依て此病を直さうとして居た精神病者である事が判明した。

夏になると、精神病者らしい者が、三日にあげず、宮城を覗いて潜入しようとするので、皇宮警察では、半藏門や坂下門の警戒を一層嚴重にしたと、其頃の新聞に書いてあつた。

私はこんな話を聞いた事がある。
兵庫縣の某（七十二歳）は、京都から東京の知人をたよつて出て來たが、

「俺れは一大事を上奏したいんだが、ウツカリこんな事を人に話をするると、キツト邪魔がはいると思ふから、俺れは久邇宮、賀陽宮兩殿下の手を経て上奏するんだ。」

と言つて、知人の家を飛び出し、麴町平河町の久邇侯爵邸の附近を徘徊中、憲兵の爲に捕へられたのがあつた。調べて見ると、或宗教に凝り固まつて、精神に異状を呈したもので、久邇侯爵邸を、久邇宮家と間違へたものであつた。

私はまたこんな話を聞いた事がある。

攝政宮殿下に宛て半紙四枚に亘り、時の内閣の倒壊を希望する旨を書いて、東京市長に郵送した者があつた。

警視廳が嚴探の結果、つかまへて見ると精神病者であつた。

私はまたこんな話を聞いた事がある。

或時、宮城二重橋を渡らうとしたフロツクコートを着した年齢五十歳位の紳士風の男があつた。日比谷警察署員が、取押へて調べて見ると、

「我輩は國家の危懼を憂ひ、これから、宮内大臣の牧野を訪問する處だ。」
と昂然として反身になつた。御嶽講の信者で、精神に異狀を呈したものであつた。

私はまたこんな話を聞いた事がある。

滋賀縣の某(三十一歳)は、直訴狂として、其節の注意人物であつた。彼は或時、汽車中で尾行巡查を卷いて沼津に下車した。彼は思想問題に關して、御用邸に在します兩陛下に直訴するんだと言つて、御用邸前に來た處を、沼津警察署員に取押へられ、沼津驛に連れ戻され、そこから靜岡に送られたが、又も列車内で尾行巡查を卷き、再び沼津驛に下車、御用邸前に差掛つた處を捕へられたといふ執念の蛇のやうな男であつた。

以上の例話のうち、三つは何れも宗教に凝り固つての精神病患者である。

私の病院にも、或宮様に電話をかけたとかいふ患者が居た。口癖のやうに、

「俺れは早く退院して、又宮様に電話をかけたいなア。」

「今度宮様に電話をかける時は、巡查なんかにつかまるものか。」

など、言つて居た。

かうした患者の取扱ひ方は、病院としては、並大抵の苦勞ではない。萬一逃走でもしたら、それこそ何を仕出かすか、殆ど豫想も出來ない。従て私の病院では、此種の患者に對しては特に警戒の眼を離さなかつた。

色 情 狂

私の病院では、男子部と女子部とは、病棟が劃然と左右に別れて居り、男子部は、男の看護人、女子部は、看護婦が専らその看護に従事した。男の患者を男の看護人が扱ふのは、女の細腕では、到底扱ひ切れるものでないと同時に、よしんば、普通人と狂人の間にしろ、萬一男女間の間違ひがあつてはならぬといふ理由に基くものである。女の患者を男の看護人に取扱はせないのも、同じく男女間の關係を未發に防ぐが爲めに外ならぬ。

これを要するに、男子部には女子部には男ツ氣がなく、女子部には男ツ氣がないといふ譯になる。
男の患者は、絶對とは言はないが、比較的性慾の事を口にしない。それでも患者慰安會の時などは、來賓席の婦人を眺めて、精神病者特有の氣味の悪い薄笑ひを口邊にたたへて居る者もあつた。私の妻の友人の某婦人などは、薄氣味が悪くて居たゝまれないとあつて、その席を立つた事がある。

男の患者は餘り性慾の事を口にしないが、唯白癡の患者になると、全然克己心がないといはれる程、食慾と性慾に對して旺盛なものである。彼等は理性ある人間の域を去つて、既に山羊野兎と爲つたのである。

感化院などでも、低脳兒が外來の婦人を見ると、異常のショックを受けて、イケナクなるといふのは、これと同じ理窟であらう。

男の患者とは反對に、女の患者は性慾に關する事を口にする者が非常に多い。だから、男の參觀人などがあつたりすると、病室は急にザハツキ出す。眼の色をかへて廊下に飛び出す者、

流し目を使ふ者、袖をひく者、しなだれかかる者等々が簇出する。そして彼等の或者は、あられもない大口をたゞく。全く以て君子の耳を掩はねばならぬやうな場面がイクラもあつた。但しこれらの詳細は、何分にも風俗壞亂のおそれがあるので、一々具體的の實例を擧げるわけには行かぬ。

詮ずるところ、酒がありてのうき世、女があつての此世だと、多くの人は言ふであらう。氣狂ひになつても、煩惱の迷ひを解脱する事が出来ぬとあつては、都々逸の文句通り、色の世の中、苦の世界である事を否定し得ない。

されば佛の教へにも、色即是空、空即是色、心耳を澄まさざれば、眞如の月見ゆることなく、眞如の月を見ざれば一念發起の扉開くことなし。此理一ありて二つあることなし。罪障の雲來れば、五慾煩惱必それに應じ、夢幻の世に身を狭くす。彌陀の淨土に達するは、これ煩惱を厭離し、念佛に一向するの謂なり。

とある。

さて、悟りの道の遠くもあるかな。

誇大妄想狂

どこの精神病院でも誇大妄想狂といふのがあつて、何れも大風呂敷を廣げて相手を烟に巻く。まことにうき世ばなれのした天下は太平至極の風景である。

誇大妄想狂といへば、誰れでも松澤病院の蘆原將軍をおもひ出す。病院生活の長き事、實に五十幾年、或時はシルクハットを頭に載き、又或時は金紙の軍服然としたものを身に纏つてやれ正三位だ、やれ勅任官だと獨で悦に入つてゐる他愛もない男である。

私の病院にも、誇大妄想狂は幾人あつたか、およそ數へ切れない位であるが、院長橋博士が蘆原將軍に比して遜色がないと、ハツキリ折紙を付けた患者が一人あつた。

大正五年の事、中外商業新報は、東京の各精神病院を訪ねて、代表的患者といふのを物色した。

その時、橋院長が、

「僕の方の選手は蘆原以上の誇大妄想狂ですよ。」

と言つて、同社の記者に紹介したのが、森永聖玉尊者といふ患者であつた。

今その記事を読んで見ると、少しも、チャーナリズムの興味中心に墜ちて居らず、事實を枉げぬ描寫である、私は次にその全文を轉載する。

戸山脳病院

森永聖玉尊者

抜け辨天を降りて一二町萩の花が今を盛りと咲き亂れて居る戸山腦病院は橋健行と呼ぶ眞頃迄府立巢鴨病院に勤務して令名のあつた若い醫學士が院長として醫務を看て居る。若い新しい人物の采配を振る病院は萬物生々として誠に心地のよいものである。此病院には實に大變な奴が居る。若い院長が「僕の方の選手は葦原以上の誇大妄想ですよ」と笑つて連れて來られた男を見れば、鼻下に八字髭を蓄へ顔色はちと營養不良に黄ばんでこそ居れ、氣品あり、威嚴あり、天晴堂々たる偉丈夫である。彼は鹿兒島縣人で永く縣廳の技師を勤め後伊集院彦吉氏が北京の公使となるに及んで多少の縁實を求めて滿洲で鑛山事業を営んだが不幸失敗し悶悶の末終に今日の境涯に陥つたものらしく、自らは釋迦の生れ代り聖王尊者と稱し、神聽經と云ふ經によつて神に伺ひを立てれば森羅萬象一として解決せざる無しと云つて居る。斯んな調子で自分は釋迦であると納まり返つて居るものだから他の患者共が癪に觸つて「オイお釋迦様お前は憤らんだらうな」など云ひ様、彼の鼻の邊りへお尻を當て「ブーツと一發放つたり或ひは足蹴にしたりお膳を轉覆したりしても平然無念無想の態を變ぜず「神佛に刃向ふ者は必ず罰當る

べし」と空嘯いて居る。四五日前彼に尻を呉れた男が脚氣に罹つた處が尊者微笑しつゝ「ソレ見た事か俺に仇する者は決して神が無事にや置かんよ」と威張つたさうな、此男は葦原と正反對に大の大隈嫌ひで、口を開けば大隈の悪口を吐く、昨年御大典の前彼は例の神聽經によつて「大隈は身體が穢れて居る、あゝ云ふ男に御一代御一度の大典を奉行せしむる事は日本國體の名折れである、若し大隈が強ゐて大典を奉行せんか彼は立ち處に神罰を蒙つて身命を墮すであらう」と豫言して居た處、途中病氣に罹り岡陸相代つて賢所に供奉し次いで同陸相は死去したので、尊者は鼻高々と「乃公の豫言に間違ひはあるまい、大隈も無理にやれば必ず神罰を蒙つたのだが、中途岡にやられたから、自分は助かり、可愛さうに岡は何の罪も無いのに死んで仕舞つたのだと吹聴し廻つて居ると云ふ。兎に角葦原よりは頭惱があつて條理が立つ、そして云ふ事が却々大きい、葦原も却々油斷が出来ない。

尊者は記者に對して種々なものを見せた、西洋半紙廿枚綴の帳面に一杯文字を書き列ねた所



謂神聽經を五十冊位、それから法華經を手寫した巻物それに伺ひを立てる時に用ひる鉛筆と筆
伺ふ時には鉛筆で書き神の御宣託は筆を持つと自づと筆先が動いて現はれるのだと説明した。
記者は然らば試みに一ツ伺ひを立て、貰ひ度い「今秋米國大統領選挙には何人が果して當選す
るや」……、彼言下に「そんな事は何でもない」と件の鉛筆を持つて何か書いて居たが、今度
鉛筆を置いて筆を持ち「師與、是無、運均」と書き「あゝ判つた、ウキルソンには運は是れ無
しとある。即ちウキルソン落選してヒュース當選疑ふ可らず」と得意になる。然らば「現内閣
の壽命は如何と問ふと型の如く鉛筆と筆とで「聖玉、出現、是勢」と記し「ア、之は大問題
ぢや、乃公が世の中へ出現せんうちは現内閣は動かんとある。その乃公の出現は人力を以て如
何ともす可からず、神は地神に命じて一大地震を起させ、此病院の庭の中央が割れる、スルト
其處から三億五千萬圓の金銀が湧き出し世間の奴等がワーツと騒ぎ出す、面白いな」と有頂天
になる「君はお釋迦様だと云ふのにどうしてこんな病院へ入つて苦しんで居るのか」と訊くと
「釋迦が地獄で修行してゐるんぢや」と嘯く、此邊から彼の氣焔は炎の如く高くなつて來て奔

騰殆んど底止する處を知らない「此次ぎの内閣は去年の九月十五日の日にチャンと、乃公の神
聽經に載つて居るんぢやそれは松方正義、閣員の顔觸は原敬、犬養毅、床次竹二郎、大岡育造
元田肇、田健治郎、高橋是清、山本權兵衛の九人ぢや、此中の田健は官僚派ぢやが貴族院で奮
闘した功によつて乃公が任命してやつたんぢや、高橋是清は悪い事をして金を貯めた男ぢやが
割合によく出すからまあ好い、一體今の人間で悪い事をして居ない奴は一人も居らんよ、其中
で西園寺公望丈けは綺麗だ、東郷平八郎は眞面目な顔をして居るが、どうして彼奴は喰へん奴
さ」此男は矢張り一種の政治狂であるらしい。それから「歐洲戦争の終期は如何」との問ひに
對しては「歐洲戦亂の慘と我がコレラの慘とは共に乃公を世の中へ出さうとして神がやつて居
る仕事で君等の凡俗には判りつこないよ」とカラ／＼豪傑笑ひをした、歸る時近作なりとて二
首を示したが何の事だか薩張り判らぬ。

明けて行く長門の浦に舟出して今滿洲を鹽と道

米の成る木を知らない人は千里の山の古狸戸ん戸ん

X X X

佛蘭西の愛國少女、ジャンヌ・ダークを誇大妄想だと言つた人がある。

百年戦争の時に、佛軍は頻りに英軍の爲めに敗られ、遂に王の死守したオルレアンの落城も目の前に迫つて來た。

この時である。ドン・レミーの農家に生れた十八歳の少女、ジャンヌ・ダークが、敢然として振ひ立つたのは。神は我れに祖國を救へと命じたまへり。我れ神託を奉じて、祖國を累卵の危きに救はむ。かくて彼女は、白百合の旗を捧げて、軍の先頭に立つて進んだ。

此れを見た佛軍は何かは知らず、物の怪に憑かれたやうな氣持ちになつて、勇氣百倍、奮戦又奮闘、到る處に英軍を打ち破つて、狂瀾を既倒に廻した。

併し一四三〇年の戦争に、彼女は惜しくも敵手に捕はれ、翌年の五月三十日、その兇刃にたふれた。

五月三十日、佛蘭西では、此日を記念日として、心から彼女の功績を讃美する。

彼女を誇大妄想なりと説く人は、果してその重點を何處に置くか。

それは言ふまでもなく、妙齡の一少女が、神託を受けたと言つて、佛國を脊負つて立つた意氣を指すのである。彼女は説を爲す者の如く、ほんたうに誇大妄想狂であつたらうか。天才と狂人との區別は、紙一枚の差に過ぎないといふから、或はさうであつかも知れぬ。若しさうであつたとしたら、國歩艱難の場合には、誇大妄想者の一人二人は出て貰はなければならぬ結論になる。

放火狂の少年

私の病院に年齢十六七の白皙明貌の少年があつた。

この少年は、一見しては精神病者とは見えない風貌の持主であつた。その顔面も普通人の表

情で、癡呆らしい處もなく、又言語應對も至つてハツキリして居た。

が、此少年には放火癖があつた。そこに精神の大なる缺陷があつた。

病院に於ける彼は、何とか工夫して、此病院に火を付けてやり度いものだと口言して居た。

此病院が全焼したら面白いだらうなあなど、言つて居た。彼は病院に放火して、紅蓮の如き火焰の天に冲するを見て、ひそかに悪魔の笑を洩らしたかつたのである。彼は朝から晩まで、何をすることもなく廊下蔭をして居ながら、何とかして一本のマッチを得る方法はあるまいか、何とかして二三枚の古新聞を得る工夫はあるまいかと、その事ばかりを考へて居たに違ひない。彼の思はくが實行されて、病院が焦土になつては大變である。だから彼に對しては、病院として是不斷の注意を怠らなかつた。

或冬の夜半である。

その夜はヒドク木枯らしが吹きすさんだ。私は不圖眼がさめた。こんな晩は、特に火の元を用心しなければならぬなど、考へて居ると、あわたゞしく門を叩く者がある。私は何かしら

不安な豫感におびえた。

それは看護人が、病室にボヤのあつた事、そしてそれを消しとめた事を報告に來たのであつた。

私は驚いて現場に駆け付けた。

現場は男子部の一病棟の或室の押入の中であつた。二間の押入れは、天井を焼け抜いて、そこからあたりは消火の水で、グシヨグシヨに濡れて居た。

如何してこんな處に火を發したか。それは例の少年の仕わざであつた。

そんなら彼は、如何して此室に火を放つ材料を得たか。

彼は或時看護人のたまりに行つて、その室から古新聞の二三枚をクスネて、人にさとりられぬやうに、大事にしまつて置いた。彼は又或時看護人が、ふとその室に置き忘れたマッチをクスネて、押入の中に隠して置いた。さうして、その夜患者の寝靜まるのを待つて、看護人のすきをねらひ、この押入の中に放火したのであつた。

私は林立せる看護人に向つて、大事が小事で済んだのは結構此上もなかつたと、その勞を痛めた。すると後の方で、クスクスと笑つて居る者がある。それはその夜の火の元たる魔の少年であつた。

この放火狂の少年は、見方に依つては不良少年とも見えるであらう。不良少年の中には、變質者もあり、低能兒もあり、早發性癡呆もある。私はこの少年の精神鑑定書を見た譯ではないが、或は不良少年中の變質者ではなかつたらうか。變質者に精神病の發作ある事は申す迄もない。

私の病院では火氣には、細心周到の注意を拂つたので、後にも前にも小火程度のものでコレキリであつた。一度隣接せる陸軍砲工學校が火を發した時、風下になつて居たので、類焼はとも免れぬ處と觀念の臍をきめて、患者の避難立退きに從事した事がある。然るに天佑なるかな。風向きはグルリと變つて、危い處を免れた。

經營二十八年間に、この少年の放火した小火以外に、火災の厄を見なかつた病院も、私の經

營をはなれて東京醫專の手に渡ると、間もなく自火を發して烏有に歸した。

癲 癇

患者が水を見詰めて居る。突然ウウとうめいて、そこに卒倒して口から泡を吹く。患者が火を見て居る。イキナリその火を掴む。そしてそこに悶絶する。かうした發作は、暫らく夢中の状態を続けるが、やがて意識を回復して今のさきまで、そんな事があつたのかと言はぬばかりの顔をして居る。俗に言ふ水癲癇、火癲癇の發作である。

伯林のウンテルデンリンデンで、二人の日本人が立話をしてゐるうちに、一人が急に癲癇を起し、ヒドク相手を困らせたとの話を聞いた事がある。

精神病學者の説によると、癲癇は是れを眞性癲癇と、徵候癲癇の二つにわけける事が出来る。

眞性癲癇の原因は何であるか。それは今日までの醫學の研究では、カイクレわかつて居ないと

の事である。微候癲癇の原因は何であるか。それは微毒とか、尿毒症とか、頭部の外傷とか
による病氣の一徴候として現はれるものだといふ。

ドイツの精神病學の大家クレペリンの説によると、癲癇の八十七パーセントは、遺傳的のも
のだといふ。更にその遺傳の原因を調べてみると、患者の兩親の何れかが大酒家であるといふ
のである。ノイマンの統計によれば、癲癇の二三・七パーセントは、兩親の何れかが酒客であ
る場合、四・七パーセントは、先天性微毒の場合だと言つて居る。

私の病院にも、時々癲癇患者があつた。坪内逍遙博士が近所に住んで居られたので、癲癇の
發作を是非一度見せて貰ひたいと言はれた事がある。思ふに博士は、何か創作の材料にでもせ
られる考であつたらう。

併し癲癇は前にも言つた様に、發作的のもので、發作が起つたから、ソレ人を博士の家に走
らせるなどといふ風に、オアツラへ向きには參らなかつた。たとへば越中の滑川や、魚津の海
上に、五六月頃にあらはれる蜃氣樓の様なものだ。富山の町に住んでる人が、これを見たいと

思つて、蜃氣樓が見えたら電話で知らせてくれろと頼んでおいて、さてその知らせがあつたの
で、超スピードで自動車を飛ばし、現場の海岸へ駆付けた時には、もう蜃氣樓は何の跡形もな
く、雲散霧消して居ると同じ譯だ。

文士の中村古峽氏は、精神病學にも相當趣味を持たれ、癲癇の發作を見たいといふので、幾
日かの間を私の病院に通はれたが、遂にその發作を見る事が出来なかつたといふ事を聞いて居
る。慥か此頃物故した千葉醫科大學教授の橋健行博士が、私の病院の院長であつた時代だと思
ふ。

露西亞の文豪、ドストエフスキー、佛蘭西の文豪、フローベルは、共に癲癇患者であつたと
聞く。但フローベルの場合にありては、彼の卒倒癖たる痼疾は、眞の癲癇ではなく、ヒステロ・
ヌウラスステニイと名づくべき精神病だと言つてる人もある。事實癲癇患者には、天才とか、精
神異常者が澤山あり、又性的犯罪者が相當に多いとの事である。

妄想百態

精神病者の持つ妄想にはいろいろある。

私の聞いた妄想のいくつかを次に書いて見よう。

- 一 自分は大富豪でありながら、貧困で三度／＼の飯すら食ふ事が出来ぬと考へて悲觀して居る者。
- 一 自分は萬人に優れた體軀の持主でありながら、どうも身體が弱いので、もうちき死ぬんだと考へて悲觀して居る者。
- 一 道路を歩きながら、目の前の地面が陥没するやうな感じがして、自然に足のすくむ者。
- 一 芝居を観て居ながら、目の前の柱が倒れて、自分が其の下敷になつて壓死するやうな感じのする者。

- 一 水を飲みたいが、其の水の中には毒があると信じて飲まないで居たが、どうにも咽喉が乾いて我慢がしきれず、自分の小便を飲んだ者。
 - 一 外を歩きながら、ナポレオンが飛行機に乗つて來たとか、アルプス山が見えるとか、そこを通つてゐる女學生がジャンダークに見えたとかいふ者。
 - 一 毎晩自分を強姦に來る者があると感ずる者。
- 以上は所謂貧困妄想、心氣妄想、虛無妄想、被害妄想、被害妄想、探偵妄想、嫉妬妄想などの例である。
- 斯ふいふ事を書きたてれば、千差萬別、僕を更ふるも盡くる所を知らぬ。
- 私の病院に入院してゐた患者で、自宅に居る愛妻が、不義をして居るのが目に見えろと言つて病院を飛び出し、途中で出刃庖丁を買ひ求めて家に歸つたなどいふのがあつた。
- 佛國のジャンダークは、誇大妄想狂であつたと説く人がある。ロンプロゾー曰く、天才と狂人とは殆ど紙一重の差なりと。狂人の豪いものになつたら、さうしたものかも知れぬ。

憑依妄想

九州のある大都會の、相當階級のサラリーマンA家で起つた話。

A家の何番目かの娘が調子が狂つた。精神病といふ程でもないが、どこともなく様子の違ふのが、人の目に立つやうになつた。土地の博士は、小兒ヒステリーと診断した。併しその母はそんな事を信じない。一圖に狐が憑いたのだと考へた。

そして間もなく憑いた狐をおろすといふ行者が、A家に入出入するやうになつた。

行者は娘を一室に入れて、勿體らしく呪文を唱へた。母はもう一切を行者にまかせて、安心して居る。併し娘の父には、少なからぬ不安と疑懼の念があつた。病の高い妻の氣休めのためにあつた行者を呼ぶ事を許しはしたものの、さてその行者は、どんな事をするといふのか。それが氣掛りになつた。

父親は或時、室の外から内の様子を窺つて居ると、行者は何かしら口の中でブツ／＼唱へて居たが、やがての事、大喝一聲、娘を打つのはひである。これは大變だ。これは黙つて居られないと、イキナリ襖を明けて、その室に飛び込むと、行者は右手に高く棍棒を振上げて、グツと娘をねめつけて居た。

かうした一場の捫着があつて、親族相談の結果、娘は私の病院に入院した。

王子の狐といふ落語があつて、親狐が子狐に向つて、人間といふ奴は、狐を誑かすから氣を付けなよと教へるのが、サゲになつて居る科學萬能の世の中に、相當のインテリ階級の家庭で今猶ほ狐憑きなど、ナンセンスな事を眞に受けて居る人間が實在する。

精神病學に憑依妄想といふのがある。狐に憑かれるとか（歐洲では惡魔憑き）、神懸りとかいふのがそれである。狐憑きのヒドイのになると、「あゝ今狐が頭に來ました」とか「今狐がかう言つて居ます」などと言ふ。これは取りも直さず、精神病者の幻聽である。自己の人格の分裂である。

私は醫者ではないから知らないが、若し自分で狐に憑かれたとの信念を持つものが、憑依妄想であるならば、あの人には狐が憑いて居ると確信して居る此話の中の母親の如きも、又憑依妄想といふ可きではなからうか。それとも、單に迷信位の處で済むだらうか。

狐につまゝれたとか、狐が憑くとか、狐が人間に化けるとかいふ事を、世の中が一般に信じて居る時代、その信念が常識と爲つて居た時代は、それでいい。併し今日のやうに、科學が一切を征服する世の中に、而かも相當の家庭で、假にもそんな事を信ずる者があるとしたら、その人は精神に缺陷があるのではないかと、少し小首を傾けたくなつて來る。

畢竟その人の環境、教養の程度等を綜合して、決定す可き問題であらう。

蘆原將軍

大正十四年五月十六日、私の病院で、醫學博士橋健行を招聘して、その陣容を立て直した時

の事だ。當時精神病學の泰山北斗であつた醫學博士、吳秀三は私に向つて、

「蘆原將軍を君の病院に轉院するやうに、取り計らつてあげようか。あゝいふ世間に名の賣れた代表的の患者が一人居ると、病院の宣傳には至極いいんですよ。」

と言はれた。私は、

「御説の通り宣傳には此上なしでせうが、あゝいふ社會的に知名な患者が居る事になりますと、取扱ひも随分面倒でせうし。」

と、その厚意を謝して辭退した。すると博士は、

「實の處を言ふと、巢鴨でもあの患者には、手が掛り過ぎて、困りぬいて居るんです。何しろ天下御免の我儘者で、それに新聞記者などの訪問がウルサクツテね。」

と問はず語りに本音を吐かれた。

吳さんがコンナ事を言はれた一事に徴しても、およそ蘆原將軍といふ特異の存在の厄介さを想像する事が出来るであらう。

私の聞く處では、將軍蘆原金次郎が公立癲狂院に入院したのは、明治十三年の事であると云ふ。

春風秋雨、それから五十幾年の月日が流れた。當時上野公園の傍にあつた公立癲狂院は、蘆原の入院した翌明治十四年八月には、本郷區東片町一番地に移轉し、同十九年六月には、更に小石川區駕籠町四十五番地に移轉し、同二十二年三月には、東京府立巢鴨病院と改稱し、大正八年十一月には、東京府荏原郡松澤村（今の東京府世田谷區北澤町三丁目千四十八番地）に移轉し、東京府立松澤病院と改稱した。すなはち蘆原は、公立癲狂院、東京府立巢鴨病院から、現在の東京府立松澤病院を通じて、正に半世紀以上の病院生活である。それなればこそ蘆原は、病院を楽しい吾が家と心得て、千の數を越す狂人群像を家の子、郎黨のやうに考へて、顎で指圖をして居る譯であるが、併し人生五十、その全生涯を、走屍行肉と爲つて、精神病院に横たへた蘆原も、今年の二月二日、將軍のニツク・ネームを返上して、八十八歳の高齡を以てその魂は天國にかへつた。

蘆原は誇大妄想狂である。それも、位記とか、勳章とか、大禮服とかをほしがる誇大妄想狂であつた。

蘆原の發病は明治八年十月十六日とある。その頃の事であらう。千住の電信局へ、ブラリとあらはれた一人の男があつた。そして窓口から威丈高に、

「俺れは、正三位左大臣勅任官蘆原將軍諸味だ。清國の李鴻章へ、一ツ電報を打つて貰ひ度

5.1

と言ふのであつた。申す迄もなく、それが當年の蘆原で、其時が精神病者としての折紙をつけられた最初であつたと云ふ。まことに他愛のない罪のない、ナンセンスである。

だから、蘆原は、何時でも金紙の大禮服を着て、鉛の勳章をブラ下げて、顯要赫々の大官人に納まつた積りで、自己陶醉の境に入つて居たのである。

金紙の大禮服を身につけて、鉛の勳章を胸間に釣つて、俺れは勅任官だぞ、

俺は陸軍大將だぞ、

俺は源の義家の生れ代りだぞ。汝下司下郎奴。

など、得意になつて怒鳴り散して居るのを見ると、之れを評するに、悲惨な滑稽といふより外に、適當な言葉を見出す事は出来ぬ。

大正十二年の大震災の直後であつた。或新聞記者が、松澤病院に彼を訪ねて、

「將軍、東京の恢復策として、お考へになつた妙案はありませんか。」

とお伺ひをたてた。すると蘆原は、こゝぞとばかりに、ソツクリ返つて、

「當分駄目だ。俺に相談もしないで何が出来るもんか。併しもう五六ヶ月も経てば、何とかなるよ。俺は、今度支那に日支の國旗を交した金貨を百億圓ばかり鑄造させて居る。それが着けば恢復がつくよ。」

と空ろそぶいた。

三田の福澤諭吉は、功名榮達にあくがれる人を誡めて、日本の常識では、一圖に官吏になる

のを出世のやうに思つて居るが、あれは根本的の間違ひだ。宿昔青雲の志などいふのは、畢竟我國封建時代の漢學思想にとらはれた傳統的の迷執に過ぎないと論斷した。昔邯鄲の廬生は、黄梁一睡の夢に、功名富貴のあわたとしさと果敢なさを悟つた。蘆原將軍の誇大妄想振りに接した人は、誰でもそこに何者か教へられる所、考へさせられる所があつたであらう。そして、又自らあく功名富貴の人を毒する此に至る乎との嘆聲を發するのを禁ずる事が出来なかつたであらう。

狂人の手記

昭和二年六月の事であつたと思ふ。

東京の某新聞に、惨虐なる某病院の内狀を暴露する一狂人の手記と題する記事が出た。その記事は四日間に亘つて連載され、委託患者を豚の如く取扱ふとか、涙なしに見られぬ救ひを求

むる手紙とか、昏々たる魔睡の夢の覺めれば恐ろしき死の床に横はつて居たとか、正視するに耐へぬ餓鬼道地獄とか、日光の下で死にたい救ひを求むる最後の聲とかいふ大活字の見出し付であつた。

某病院は私の同業病院であつた。私は其の病院を參觀した事もある。

世の中の人は、かうした記事を見ると、大概は無條件にそれを信ずるやうである。實にヒドイ、實に怪しからぬ、由々しい人道問題であるといふやうな叫びを聞くやうになる。併しそれは本當に精神病院の何たるかを、又精神病者の何たるかを知らぬ人の言ふ事であると思ふ。

かうした手記を、一も二もなく無條件に信ずる人があつたら、それは大變な間違ひである。

狂人の手記といふやうなものは、如何せその病院を善く言はないのは當然の事だ。自分が病院に監禁されて居る事を憤慨して居る手合の手記だ。初手から悪意を以て書いて居るのは當然の事だ、殊にその患者に色々な妄想でもあつたら、間違ひだらけの事を書いてるのは當然の結論だらう。

だから私は此記事を見た時に、ノツケから割引して考がへて居たし、又人の興味をそゝり立てるやうなチャリナリズムの見出しなどは、何等私の心を打つ處がなかつた。唯嗚呼又例の手だなどと思つた位の事である。

狂人の手記に付て、私は苦き経験を有する。東京府立巢鴨病院にAといふ患者があつた。話はAがその巢鴨を退院した事に始まる。

Aは巢鴨を退院した。それも全治退院といふ事であつた。Aが病院附近の宿屋に陣取つて居る處へ、郷里から老父が迎ひに來た。するとAは、イキナリその室に一步を踏み入れた老父の頭上に鐵拳を食はせた。老父も驚いた。これは全治でも何でもない。こんな狂人を如何して郷里へなぞ連れて行かれるものかといふので、再び巢鴨に入院を申込んだが、巢鴨では之れを許可して呉れなかつた。そこで三つ四つの私立病院に入院を交渉したが、何分にも月に十五圓しか入院料を出せないといふ話なので、何處の病院でも怖氣をふるつて、これを引受けて呉れるものは無かつたのである。

かうした譯で、とう／＼或手蔓を以て私の病院へ入院を申込んで来た。それは氣の毒だ。引受
受けようと云ふ事になつて、Aは私の病院に入院した。

義侠心を出してAを入院させた事は、私の病院に取つて、取返しつかぬ禍根となつたので
ある。

Aは憤慨した。

「この病院は實に不届至極だ。府立巢鴨病院の院長吳博士といへば、精神病醫の第一流だ。そ
の吳さんが全治と診断して退院させたものを、この病院で直ぐ入院させるといふ法は無い
ではないか。それは入院料をほしいからの事だらう。よしそんなら俺れにも考へがある。俺
れは俺れの力で、この病院を完全にたゞきつぶして見せる。必ず屋の棟にペン／＼草を生や
して見せる。見てろ。見てろ。」

かういふ事を始終口にして居たさうである。

それから、所謂狂人の手記が始まつた。

Aは院内に於ける見た事、聞いた事、及び之れに對する感想のやうなものを書き付けた。後
から聞いた處によると、老然たる大冊子を成して居たさうである。

私の病院としては、一ヶ月の入院料、十五圓で引受けたのは、元々商賣氣を離れての義侠心
からであつた。

然るにAの入院後、入院料の入つたのは僅かに二ヶ月だけの事であつた。そして空しく一年
の月日が流れた。病院でも全くの慈善事業といふ譯でもなく、それに不満々の患者一變質狂
といふ六かしい患者一の事だ。イツソ退院させるがよからうとの事になつて、Aを退院させた。

Aは時こそ至れりとばかりに雀躍して喜んだ。Aは悪魔と爲つて會心の笑ひを洩らした。
それからである。

Aは所謂狂人の手記を懐にして、監督官廳を訪ねた。新聞社を訪ねた。

Aの投じた一石は、それからそれと色々な波紋を生じた。

後で院長橋健行博士が、私に語つた處によると、Aは巢鴨に在院中も、盛に院内の見聞隨想

録を書いて居た名代の患者であつたと云ふ。

禍なるかな。狂人の手記！

呪ふべきかな。狂人の手記！

封筒を貼る

精神病院に入つて居る患者は、一體終日何をしてるかといふと、鎖鋼室に入れられて、怒鳴り散らしわめき散らして居者の外は、大抵は室内や廊下を懐手でブラ／＼歩き廻つて居る。中にはスツポリと、夜具の中にもぐり込んで、一切人に顔を見せないなどいふものもある。私の病院では軽症患者、快復に近い患者は、封筒貼りをやつて居た。今日市場に出て居るハトロンの安封筒には、かうした精神病者の手に成つたものが澤山ある筈だ。女子の患者は、封筒貼りの外に、麻絲つなぎといふものをやる。

成程日がな一日、懐手で廊下薦をやつてるよりも、何か一つの仕事に興味を感じずるならば、それだけ氣がまぎれる譯で、これに依つて患者も救はれる事になる。

熱心な患心になると、追々に手の先きも冴えて来て、一日に七八千枚位の封筒貼りは容易にやつてのけた。千枚や二千枚は朝めし前の藝當であつた。

私の病院では、此利益全體を患者の収入とし、一人々々、患者別の帳簿を作つて、その收支がキチンとわかるやうになつて居た。

一週に二度、封筒作業金を持つ患者のために、特に買物をするの便を取つた。買物は九分通り食物であつた。

氣の狂つた人達にも、色氣もあれば物慾もある。作業貯金の殖えるのを楽しみに、セツセと封筒貼りにいそしむのであつた。

私の病院に居た公費の患者で、封筒作業の収入の中から、月々若干の金を、郷里の親許に送るのがあつた。

俸を一人前に仕立てるが爲めには、祖先傳來の田地畑を賣り飛ばし、果ては無産状態になつてしまふ人さへある。親のすね嚙ぢるむすこの齒の白さ、さて私立大學の一つも卒業はして見たものゝ、五年六年の就職難にたゞられて氣を腐らし淵河へ身を投げて死んでしまはうかなと思ふのが關の山でそれこそピタ一文の金だつて、國許へ送るところの驢ぎではないと云つたやうなのが澤山ある。

かうした連中が、そこにもこゝにも、ウヨ／＼して居る世智辛い世の中に、何ぞ圖らむ精神病院生活の狂人が、月々一定の收入を得て、その中のイクラかを、郷里の親許へ送金すると云ふに至つては、皮肉な世相を反映して、全く開いた口がふさがらないではないか。

患者の作業封筒は、今日では立派に患者治療法の一つに數へられて居る。それどころか、封筒作業の治療に及ぼす効果を論じて、醫學博士の學位を贏得した人さへあると聞いた事がある。然るに、今から遡つて五十年前の明治二十一年十二月の事、下谷の根岸病院では患者に封筒貼りの作業を課したのがイケナイといふので、警視廳からその停止を命ぜられ、且つ始末書

を徴せられた。

精神病學の權威、石川貞吉博士は此事を評して、

「當時醫學も發達せず、又種々なる事情に依るべしと雖も、當局に全く精神病理の思想を缺きたる結果に外ならず、從て斯學の施設、延ては斯學其自身の進歩に支障を與へたる一事例として解すべし。」

と董狐の筆をふるつた。

患者と食事

精神病患者の一日の樂しみといへば、何と言つても三度の食事であらう。日がな一日、何をすることもなく、ブラリとして居る連中の事だ。食ふ事の外に樂しみのないのも無理もない。尤も自費の患者になると、親兄弟や親戚友人が見舞に來て、何かしら食ふものを置いて行く。

だから、それ程食物に興味を感じないかも知れぬ。併し公費の患者になると、揃ひも揃つて、この世の中に寄る邊知る邊のないあはれな人達ばかりである。親兄弟があつても、所詮は鹽煎餅の一袋も持つて来る事の出来ない、しがない身の上の人達ばかりである。かうしたあはれな境界に置かれる患者に取りて、最大の快樂は、先づ三度々の食事の外にないのであつた。私の病院では、毎年節分の夜には、病室で豆蒔きをする慣例であつた。或年の節分の夜、警視廳警部を罷めて、事務長になつたばかりの星島孝造が、年男になつて大きな箆に煎豆を満載して、第一病棟の前に立つた一瞬間、十數人の公費患者は、ソレツとばかりに、星島を取巻いて、難なく其手から大箆を奪つてしまつた。私は此一文を草しながら、

「イヤおそろしいものですな。」

と失心したやうになつて嘆息した。今は世に亡き星島の顔を思ひうかべる事が出来る。およそ精神病者といふものは、これ程食ひ意地の張つたものである。

但しこれには二つの例外がある。

その一つは、被害妄想のある患者である。かうした患者にありては、一切食事は取らぬ。それは食物の中に、何か毒が入つては居ないかとの、疑懼の念に驅られるが爲めである。水を飲みたいが、水の中には毒があるかも知れぬといふので、自分の小便を飲んだといふ實例があつた。かういふ手合になると、醫師の投薬なども、頑として口に入れぬ。

その二は幻視のある患者である。

これは食物が食物と見えずに、全く外のものに見えるからである。

第二の場合に付ては、私は項を改めて、世にも物すこい一つの實例を語りたと思ふ。

萬物は蛇

患者が食事を取らない第二の場合には、幻視のある患者である。

これらの患者にありては、食事が食事に見えぬ。何かしら他のものに見える。だから、決して箸をとらぬ。口にしようともせぬ。

私の病院に、幻視のはげしい女患者があつた。年の頃は四十左右、一切の物が蛇に見えるのであつた。

此女は若い時分に、東京の四宿から東海道の驛々を、それからそれと稼いで来た闇の花で、その身の果てを痲痺性癡呆と爲つて、私の病院の狂燥室の鐵柵に呻吟するのであつた。

私は精神病院の經營者として、長い年月の間に、無數の患者を見て来たが、およそ此患者位凄惨の氣に打たれたものはない。羸瘦骨立、眞蒼な顔にサンバラ髪、この世からなる幽鬼である。若し圓山應舉を九原に起して、これを見せたならば、おそらくは、長崎丸山の遊廓で見た瀕死の遊女よりも、此方が一段のすこさだと、驚心駭目するに違ひない。

此患者の眼には、一切のものが蛇に見えるのであつた。病室の壁が蛇に見える。天井が蛇に見える。中庭の櫻の木が蛇に見える。否々それどころか、自分の手足が蛇に見えるといふのだ

から、何とも手の付けようがないではないか。食膳の箸を取らぬも當然の事である。

この患者は、自分の着衣をツタ／＼に引裂く。それは蛇に見えるからである。女の身のあらゆる事があるまい事か、素つ裸になつて荒れ狂ふ。

醫師や看護婦が、懸命の力を盡くして、荒れ狂ふ此女患者に、ツツク製の狂衣を着ける。すると愈強亂の度を加へて、蛇が／＼と泣き叫ぶ。

およそ此世の中に、凄絶慘絶これに比較し得る何物があるであらうか。

私は或時、夜の一時頃に病室を視察して、此の患者の入つて居る狂燥室の前に至つた時、思はずそこに立ちすくんだ。そして冷水の脊筋を走るを覺えた。

何といふ物凄い光景であらう。

それは最早人の世のすがたではない。

その顔には一滴の血の氣も無い。髪はバラリと振り亂れて、その脊に流れて居る。そして鐵柵の中から、ひからびた手を差し伸べて、若い看護婦の髪を掴み蛇が／＼とわめいて居るので

あつた。言ふ迄もなく、その若い看護婦の髪の毛筋の一本くが、のたうち廻つて居る大蛇小蛇のもつれ合ひ、からみ合ひに見えたのであらう。

私はこの時ばかりは、つくづく精神病院の看護者の職務の如何に辛いものであるかに同情した。

私は講談に出て来る加賀騒動の浅尾の局の蛇責めの一段を思ひ浮べて、身顛ひを禁ずる事が出来なかつた。

此患者の夫は、下町の商人であつたが、病院に見舞に來ても、決して病室の前迄は行かなかつた。行かないのではなく、恐しさに行く事が出来なかつたのである。だから、何時でも遠くの方から、狂亂の姿を見て、こそくと踵を返すのであつた。まことに無理もない事である。私は繰返して言ふ。長い病院經營の年月に、およそこれ程もの凄い患者を見た事は無いと。

此患者は在院六ヶ月、蛇がくともがき苦んだ果て、一夜心臓麻痺を以てつめたむくろを

鐵格子の中に横へた。

私はつくづく、麻痺性癡呆のおそろしきを思ふ。そして更に其病源たるスピロヘータ・パリダのおそろしさを思ふ。

げに色海の迷津は、賢不肖無差別である。

昔安積良齊は、

戒しむ君見る勿れ墨陀の花

花下の美人花花に遜る

戒しむ君見る勿れ墨陀の月

月下の少婦月潔きを耻づ

先哲陰を惜みて研精に勤む

何の暇か花月に耽つて流連せむ

吾れ書生を閑する三十年

修行多くは花月に因て損す。

の七古一篇を作つて、天下の學徒を戒しめた。

こゝで花月と云ふのは女色をひつくるめていつて居る事は申すまでもない。が併し、噴火山が火を噴くやうな血の氣の多い人達に對しては、口舌を以て之れを説いても、容易にその効果はあらはれぬ。私は若い學徒を、かうした患者の前に立たせて、遊蕩の果てはかうした事になるぞよといふ生きた手本を示し、實物教育をするのが一番イ、と思ふ。
私はほんたうに斯く信ずる。

X

X

X

蛇の幻視について、おもひ出されるのは、北條義時のそれである。

日本歴史の上でも、皇室に對する逆臣の一枚看板といはれる北條義時、おそれ多くも、後鳥羽上皇を隱岐に、順徳上皇を佐渡に、土御門上皇を土佐に、二皇子を但馬備前に移し奉つ

た義時。仲恭天皇を廢して、九條殿に幽し來つた義時。

この義時が、後に重い病に罹つた時、一切のものが蛇に見えた。

「蛇だ〜。苦しい。助けてくれ。」

と悶へ苦んだとある。

今の精神病醫が、その精神鑑定を行つたら、果して何と言ふであらう。

幻視に悩まされた逆臣義時は、後にその臣深見三郎の凶刃にたふれた。それは承久の亂後、三年目の事であつた。

狂人檢事を斬る

精神病患者の中には告訴狂といふものがある。最近にも瀧野川の小峯病院に入院中の患者某が自分は民政黨の院外團員として、普通選舉華やかなりし頃、二回も投獄された。この犠牲の慰

藉として、時の憲政會總裁加藤高明伯から、二十萬圓をもらふ約束をした。然るにこの契約を果さない中に、加藤伯は他界した。そこで、次の總裁の濱口雄幸に、契約の履行を要求して訴訟となり、民政黨側の辯護士だった故横山勝太郎氏に交渉、拾萬圓を受取る事に示談が成立した。然るにその後横山氏は、濱口總裁からその拾萬圓を預つて居り乍ら、それを横領したまま急死してしまつた。そこでその嗣子に當然支拂ひの責任がある。依つてその二拾萬圓の内金として取敢へず二拾圓を支拂へといふ珍訴訟を提起したと言ふ新聞記事があつた。

告訴狂は、何でもかんでも、つまらぬ事を、裁判所や検事局や警察署へ訴へないと気が済まぬ。私の病院にも會て事件屋上りのもの凄いのが居てイヤ騒々しい限りであつた。

看護人の取扱ひが悪い。告訴するぞ。今日の食事が悪い。告訴するぞ。如何に患者だつて、たまには煙草の一本位喫ませたつていいぢやないか。告訴するぞと言つた調子である。こんなのに限つて、退院でもすると、警察署や警視廳へ行つて、あの病院ではこんな事があつた。あんな事があつたと、色々の事を訴へるのである。

大正九年八月三十日午前十一時半の事、年のころは三十五六で、セルの袴に黒絹五ツ紋姿の有髯の壯漢が、東京地方裁判所にあらはれて、金山検事に面會を求めた。検事は次席検事室で、その男に會見した。

そして二三押問答をはじめた刹那に、壯漢は突如として立上つた。そして携へ來つた二尺五寸餘の日本刀を抜き放つた。検事は隣室の第二號室に逃れんとした。壯漢は検事に追ひ継がつて、後部より右肩脊部に斬り付け、左肩にも傷を負はせた。検事は血まみれのまま、廊下傳ひに、辛うじて検事控室に轉げこんだ。

この報に接した警視廳からは、時を移さず、刑事課長正力松太郎(今の讀賣新聞社長)以下正私服巡査が馳けつけた。

壯漢は血刀を提げて悠々として廊下を徘徊し、警官に敵對の態度を示した。

佐藤刑事は壯漢の後から組みついてこれを取押へ直に巡査詰所に監禁し、これと同時に警視廳から出張した石橋、淺川の二警察醫は、金山検事に應急の手當を施し、後京橋築地の林

病院に送つた。金山検事の傷は、右肩脊部深さ一寸三分、長さ一尺二寸であつた。

警視廳の正力刑事課長は、こゝで壯漢を訊問し、更に午後二時過ぎからは、検事宿直室で岩松玄十、石田基の二検事が取調を行つた。

さて犯人は何者であつた乎。

犯人は鹿兒島生れの某(三十六歳)であつた。彼は郷里の農學校、中學校を卒へて、長崎醫學專門學校に入り、中途退學して上京、水産講習所に入り、卒業して宮崎縣技手、青森縣三戸郡技手、秋田縣技手、岩手縣立農學校後諭の職についたが、高等文官の試験を受けようと言ふので上京し、本郷蓬萊町の下宿屋に止宿して居た者であつた。

然らば、彼は如何にして金山検事を斬る氣になつたの乎。

彼は一徹短慮の男であつた。彼は常日頃、警察官が人民に對して高壓手段をとるのは怪しからぬと憤慨して居た。彼は秋田縣在勤中、些細の事から、同地の巡査と口論して、その結果巡査が休職處分にされた事がある。爾來彼の警察官に對する反感は、一途に募るばかりであつた。

彼はその月上旬、草稿數十枚に、警察官の壓迫頭末を認めて、東京地方裁判所に訴狀を提出した。然るにその内容は頗る漠として、そのエツセンスの果して何處にあるかを捕捉するところが出来なかつた。金山検事は奇人の行爲と見做し、敢て之を問題にもしなかつた。

こゝに至つて彼は大いに憤慨した。金山検事の態度を以て、一途に冷淡なりと思ひつめた。彼は神田區小川町の某刀劍商から、白鞘二尺八寸の日本刀を買求めた。そして、この兇行に及んだのであつた。

検事正大田黒英記は、

「金山君は全く不慮の災難で、狂犬に噛まれたのと殆ど等しいものである。思想上や政治上の問題には、毫も關係が無い。加害者の告訴狀を讀んでは見たが、これといふ程の中心のない極めて長いダラダラとしたものである。事實狂人の書いたものとしか思はれないが、實際の狂人であるならば、殺人被告として取調べる事も出来ぬ。従つて公判に付する譯にも行かぬ。イヤ全く始末の悪い事が突發した。」

と嘆息した。

加害者に對しては、警視廳に於て技師醫學士杉江董が綿密な精神鑑定を行つた結果、精神病者と診定された。彼は告訴狂と言はれる程度の妄想狂であつた。

そして、日比谷警察署より、麴町區役所の手を経て、私の病院に入院した。金山氏名は季逸、今東京控訴院検事長である。

狂人巡查を斬る

患者が病院を逃走しても、自家に歸るとか、知人の家に行くとかで終るならば、大した事にもならないが、もののハズミで意外の事件を惹起する事がある。病院の責任問題として、如何していかかわからないやうな事が發生する。

私が次に記すところはさうした場合の一例である。

大正十一年六月三日午後八時の出来事。

浅草公園六區巡查派出所の巡查田邊五郎(廿六歳)が、北田原町を巡邏中、舉動不審の男を認めて誰何した。するとその男は、懷中から短刀を出して、イキナリ田邊巡查の腹部を目がけて斬り付けた。田邊巡查は之にひるまず、抜劍して大立廻りとなつた。男は何と思つたか、兇器を捨てて逃げ出した。そして田島町二番地、若まつ屋旅館越山三平の店先に逃げ込んだ。

田邊巡查は、自分の重傷を、忘れてこゝまで追跡した。するとその男は今度は懷から、また別の短刀を出して、左手に斬り付けた。田邊巡查もまたその男の前額部を斬つた。

この騒ぎを聞きつけた松清町巡查派出所の巡查も駆け付けて、田邊巡查と力を合せ、漸くその男を取押へて、七軒町警察署に引致した。

警視廳からは、小林警務課長(今高知縣知事)が署へ急行し、石森署長(今東京市豊島區長)と共に取調べを行つた。

取調べの結果は、私の病院にとりて容易ならぬ出来事となつた。兇漢は前日の朝に、私の病

院を逃走した患者であつたからである。

大正十年の暮に、結婚媒介の高砂社が、財産一萬圓ばかりを持つてゐる家で、養子をさがしてゐるとの廣告を新聞に出した。大工職であつた此の男は、その養子になりたいといふので、高砂社へお百度参りをした。だが併し本人の希望は達することが出来なかつた。高砂社参りで僅かの貯金を使い果した此の男は、高砂社は怪しからぬといきまいて、その尻を警視廳や澁谷警察署へ持ちこんだが、元より取り上げられる筋ではなかつたので、ここに此の男は精神に異状を來し、私の病院に入院したのであつた。病名は妄想性癡呆であつた。

田邊巡查の斬り付けた二た振りの短刀は、病院を逃走したその足で、淺草區馬道一丁目七番地の目白屋金物店の店先で、盗んだとの事であつた。

田邊巡查は田島町の片山病院に昇こまれた。傷は左手親指に一個所、臍下に突傷一個所であつた。臍下の傷は深さ三寸、内臓出血が甚しく危険状態に陥つた。片山醫師は取敢へずカンプル注射を施し、間もなく茅町の明治病院に送つた。

明治病院では、鹽田博士執刀の下に、腹部切開縫合の大手術を行ひ、尋で同型の輸血を試みた。私は驚愕措くところを知らなかつた。が、折悪く病中であつたので、院長の兒玉博士が、毎日毎日明治病院へ田邊巡查を慰問した。幸に経過は良好で、その一命を取りとめた。

兎に角、私の病院としては、患者を逃走させたのみならず、その逃走患者が、監督官廳たる警視廳の巡查を斬つたといふのだから、どんなに責任を問はれても仕方がない。私は院主として、警視廳に申開きの言葉が無かつた。今でもあの時の事を考へるとゾツとする。

理窟を言へば、警察署の留置場から容疑者の逃走する事もあり、刑教所から囚人が脱走する場合もある。併し被監督者たる私立病院經營者の私が、その例を楯にとつて、監督官廳に對抗する譯にはゆかぬ。私は衷心からその責任を感じ履霜の戒めと爲した。

狂人の悟道

大正十二年の大震災の時の事だ。

患者三百餘人を病院の中庭に避難させたが、その中でタツタ一人、如何しても室外に出るのを背んぜぬ男の患者があつた。誰れが何と言つても、挺子でも動かぬ頑固さであつた。みんなが手を焼いて居ると云ふ。

私はそこへ行つて見た。

成る程廣い座敷に、唯一人泰然として正座して居る。

彼は私に向つて、

「院主さん、死生命ありですよ。壽命が盡きれば、中庭に出たつて死にますよ。」

と悟りを開いた一言をあびせかけた。

人よ狂人の言と一笑に付する事莫かれ。彼の言葉にも眞理はある。現にそれ地震だといふので、戸外に飛び出したその拍子に、家屋が倒壊して壓死を遂げたなどいふ實例も澤山あるではないか。

私は彼の一言を聞いて、嚴肅なる氣分に打たれた。

併し此患者の言ふまゝにしても置かれなないので、後では看護人が多勢掛つて、無理に中庭に引出した。

彼は笑ひながら、

「馬鹿だなあ。」

と言つた。

オヂヤのかたまり

朝から晩まで、病院の長廊下を、

「オヂヤのかたまりエツサツサ。」

とわめきながら、行き來する中年の患者があつた。

十何年の病院生活、雨の日も風の日も、オヂヤのかたまりをやめた事は無い。至つておとなしい患者であつた。病名は早發性癡呆。

「オヂヤのかたまりエツサツサ。」

面白い事を言つたものではないか。何だか一種の悟りを含んでゐるやうな氣持ちもする。

思ふに此患者は、何だ唯物主義の世の中なんて、オヂヤのかたまりエツサツサで澤山ぢやないかとても思つて居たのかも知れぬ。

此患者の居た病棟は、私の事務をとつて居た室の眞下にあつた。あの聲は今でも私の耳朶に残つて居る。

島の王

私の病院に、島の王といふ患者があつた。

如何してこんなニツクネームが出来たかといへば、此患者は人の顔さへ見れば、判で押したやうに、

「おい君、南米智利の海岸に、今度俺は、カナリ大きな無人島を發見したぜ。一つお前を島の王に任命してやらうかな。」

と言ふのが常であつたからである。所謂誇大妄想狂であつた。

此患者は或時、私に向つて、

「おい院主、俺れも長い事、お前の世話になつた。その禮に智利の無人島の王様に任命してやらう。その代り一つアイスクリームでもおこれよ。ハツハツハ。」

と大笑するのであつた。

天下は正に太平である。

陰囊苦

「陰囊がうるさくて仕方がないから、切取つてくれ。」
と醫員にせがむ患者があつた。

「ブラリと下つて居るんだから、誰れだつてうるさいんだけど、親から貰つたものなら仕方がないぢやないか。」

と、醫員、然るべくバツを合はせて居た。

が併し、そんな生やさしい事では、イツカナ承知すべくもなかつた。

遂には狂暴性を發揮して、鎖鋼室に監禁される程度になつた。そして二六時中、

「陰囊を取つてくれ。陰囊を取つてくれ。」

と怒鳴り散らし看護人のスキをねらつては、室の隅の柱に、陰囊をコスリ付けて、自分でこれ

を裂かうくとするのであつた。

壁虎となりて

加賀の金澤生れで、吉原の遊女上りの患者があつた。

此患者は、男の陰囊を狙ふので有名であつた。初めて病院の職員になつた醫員や事務員などは、一度は屹度この患者に陰囊を掴まれる。言はば病院の税關のやうなものであつた。

此患者は或時、面會人用の便所掃除を志願した。一日ブラ／＼して居ても仕方がないから、是非便所の掃除を受持たせと熱心を面にあらはして言ふのであつた。

院長もよからうといふので、之れを許可した。

何ぞ圖らむ。敵は本能寺に在りで、此患者の狙ひどころは、そこに入つて来る面會人の陰囊を掴む事であつた。便所の破目板に壁虎のやりに、ピッタリ身を寄せて息を殺し、そこに入つ

て来る男を待つて居るのであつた。

私は筆をここまで進めて、さて此患者が、見知らぬ男の入つて来るのに渾身の興味を感じた待機の姿勢を想像して自ら笑ひのこみ上げてくるのを禁じ得ない。

病室の電燈を修繕に來た電燈屋が、此御難にあつて、床上に卒倒した事がある。

×

×

×

後で此患者は、巢鴨の保養院に轉院した。私とその病院を參觀した時、目ざとく私を見付け

て、

「院主さん〜。」

と、バタ〜と駈け寄つて來た。

私は例の手かど、思はず防衛の身構へをしたが、そんな譯でもなく、

「長く居た病院の方がイ、から、一所に連れて歸つて下さい。」

と、掌を合せて頼むのであつた。

患者相搏つ

精神病者には陽氣と陰氣との二つの型がある。近ごろ朗らかな馬鹿といふ語を聞くが、前者などは、正に此部類に屬するものだと思ふ。

毎日々々、秋雨のそぼつ頃など、うら若い女の患者が、窓際に寄つて、シヨンボリと下うつむいて居たりするのを見ると、何とはなしに物のあはれを惹く。殊にその患者が別嬪だつたりすると、朝顔日記ではないが、あはれな身の上の〜くさを聞いて、慰めてやり度いやうな氣も起る。

一口に精神病院といへば、世間の人は、ドンナニ騒々しいものと思ふかも知れぬ。

が併し、實はそんなものでもない。何處の病院でも、鎖鋼室に入つて居る患者を除いては、

比較的静かなものだ。

併し如何かすると、患者同志の喧嘩がはじまる。これは實に物凄なものだ。何しろ常識の無い、理非曲直の辨別の付かぬ人達の事だ。その猛烈さは、さながら虎と獅子との相搏つが如しである。叱咤怒號、人をして怖氣をふるはしむるものがある。

私の事務室は二階であつたが、そこから真下に見下す病棟で、春の午下りの静寂な空気を破つて、霹靂一聲、二勇士の大格闘を演じた事をおもひ出す。

ズット昔の事、九州の某病院で、看護人の知らぬ間に、A患者がB患者をなぐり殺した事がある。又去年の一月三日の新聞は、東京府立松澤病院の入院患者、佐藤正男（荒川区日暮里町九ノ一〇五五落合周八方十八歳）は、同室の患者、立松豊次郎（江戸川区小岩町二ノ二五七四、三十五歳）が自分の持物を盗んだと云つて取つ組合をはじめ、佐藤は立松を投げ飛ばし、立松は壁で頭を強打し即死したと傳へた。

若しかうした異變が、私立の精神病院に起つたら如何であらう。監督官廳たる警視廳は果

して如何いふ處置に出るであらうか。始末書を取つて、警告を發する位の事では濟みさうにも思はれぬ。代用精神病院であつたら、さしづめ、その代用の取消し、之れに尋で、業務の停止又は禁止の行政所分が伴はないと言ひ切れぬ。………勿論それは、その時の理事者の意向次第で決する問題ではあるが。……

私は精神病院の經營者であつた苦い體驗を回顧して、かうした記事を読む毎に人事と思はれず、ゾツと身顫ひを感じる。昔人曰く。すまじきものは宮づかへと。私は言ふ。すまじきものは、精神病院の經營。

アテツク・フィロソファー

どこの精神病院でも、頭を悩ませられるのは、患者の逃走だ。

相當の設備、相當の規律が立つて居るんだから、そんな筈はないぢやないかと、半疊を入れ

る人があるかも知れぬ。何分神ならぬ人間の事だ。そこにはスキといふものがある。患者は一途にそこをねらふ。

刑務所から囚人が逃げたり、警察署留置場から、被疑者が逃走するのも、これと同じ譯だ。私の病院でも、時々此御難を食つた事は申す迄もない。それでも大抵は、一日か二日で探しあてるのを常とした。

或時、一週間以上も見付からない女の患者があつて、病院でも少し氣を腐らせて居ると、女子部の湯殿の天井から、女の髪の毛が二三本たれ下つて居るのを發見した。若しかしたら、天井にひそんで居るのではないかといふので、看護人がソレッツと天井裏へもぐり込んで見ると、果してその患者が、グツタリと死んだやうになつて横はつて居た。

言ふ迄もなく、天井裏に、飲まず飯はずに、七日の間、鼠と一所に暮らして居たのであつた。

此女患者の如きは、正にアテック・フィロソファーと言つてよからう。

患者の逃走

精神病院に入つて居る患者には、其病院を安住の地として、自分の家の如く思つて居るものと、自分は正氣の人間でチツトも氣なんか狂つて居ないのに、こんな處に入れられる譯はないと、恰も不法監禁でもされたかの如くに憤慨して、折があつたら、逃げ出さうと思ひつめて居るものと、二つの型に分ける事が出来る。

第一の場合で代表的な患者は、東京府立松澤病院の蘆原將軍だ。蘆原は、松澤が公立癲狂院といつた昔から、五十何年間を病院生活をして居るのだ。だから病院を自分の家のやうに思つて居るのも、無理のない話である。こゝの主人は俺だぞと言はぬばかりの大顔をして、陸軍將校の禮服みたいなものを身に着けて、鉛の勳章を首にぶらさげて、悦に入つて居る有様は、一言すれば悲惨なる滑稽である。

第二の場合では、ただもう一途に、どうしたらこの病院を逃げ出す事が出来るかと、二六時中、その事ばかりを考へて居る連中である。よしんば、看護人は澤山居ても、見張の眼は充分届いてゐても、神ならぬ人間には隙がある。そして患者は、長い間にその隙を狙つて、逃走の目的を貫徹する。

私の病院に居た患者で、釘一本さへ手に入れば、結局は逃げて見せると云ふ物凄いのがあつた。私の病院に来る前に、松澤にも居り、それから三つ四つの精神病院を轉々したが、何處の病院でも、完全に逃走を実現したといふ體驗者であつた。

私の病院で、或時中庭に大勢の患者を出して、室外運動をさせて居た。その中庭には亭々たる櫻の老樹があつた。春は正にたけなはである。揚貴妃櫻が枝もたわわに咲いて居た。

すると患者の一人が、するすると櫻の木に攀ぢ上つたと思ふ一瞬間に、もう右の足は屋根瓦の上にかゝつて居た。看護人も續いて櫻の木に上つて、つかまへようとして居る中に、患者は猿のやうに屋根傳ひに裏口に出て、そこからヒヨイと地上に飛び下りて、章駄天走りに逃げて

しまつた。

屋上を猿の如くに駈けまはつた狂人、彼は瓦職であつたのである。

私はその中庭に、椎か桐か鈴懸を植ゑようとして居たが、この事があつて以來、そこに並木を作る事を断念した。よく參觀者などが、この中庭に櫻の木一本だけしか無いのは、ちと殺風景ぢやないか、何か蒼々とした木でも植ゑたら如何ですと、注意をしてくれる人もあつた。尤もな話である。

誰が目にもさういふ風に見えたであらう。併し事實上そこに樹木を植ゑる事の出来ないのは、こゝに記した瓦職の實例に照しても明らかである。精神病院などといふものは、他の人のわからない處に色々の苦心のあるものだ。

私の病院は、正門から玄關迄の間に、約千五百坪の空地があつた。或時二人の看護人が監視して十四五人の輕症患者を運動させて居た。すると四人の患者が、看護人を離れて、段々遠くの方へ行くではないか。一人は東へ、一人は西へ、一人は南へ、一人は北へと、それぞれ遠

つた方向へ行く。そして最後にはヘビーをかけて、扉を乗り越えて、完全に逃走のゴールに入った。監視の看護人は、あとの患者を手離す譯にもゆかず、グツグツして居る間に、四人の患者は門外に出てしまったのであつた。

今度の室外運動の時には、こんな風にして逃げようぢやないかと、患者相當の智能を發揮して、かねてから手筈をしめし合せて居たものであらう。

元來患者逃走の取締は、警視廳では相當にやかましいのであつた。患者を逃走させれば、時々不測の禍を醸し、また警視廳の心證を悪くする。その時の理事者の意向次第で、業務の禁止停止の行政處分の發令を見ないとも限らない。私の不斷の悩みはそこにあつた。

然るに近代の經濟機構に基く人心の險惡化は、私の病院にも遺憾なく發揮された。それは警視廳の監督のやかましいのを逆に利用して、自己の利益を圖らうとする看護人達の心の動きであつた。

或時看護人の一團が、結束して私に給料の値上げを要求した事がある。時の經濟事情で、私

は一時その要求を斥けた。さうすると、不思議なるかな。その日から患者の逃走が相續いた。私は警視廳から散々に油を絞られた。

そして患者逃走の眞因が那邊にあるかに心付いた私は、看護人給料の値上げを斷行するの外に策の取るべきものがなかつた。

果然、看護人のネラつた的は外れなかつたのである。おそらく、看護人達は向ふを向いて、それ見ると言はぬばかりに、長い舌を出して私を笑つた事であらう。

院主と一心同體になつて、病院の利益、信用、名譽の爲に働かうなどの考へは、彼等の頭には微塵もない。それは彼等にとつて、最も笑ふべき、古い古い思想であつた。

精神病院の經營者が、何よりも心を勞するのは、如何にせば看護人に適材を求むべき乎といふ一事である。私の病院の主事高橋義信は、看護人を使ふのは、巡查を使ふより百倍の骨が折れると歎息した。高橋主事は元警視廳警視で、早稲田市ヶ谷、板橋、府中、八王子、西神田の各警察署長を歴任した剛直にして老練な警吏であつた。

豆ばかり

私の病院の女患者に、豆ばかりを食ふのがあつた。良家の出であるのに、どうした事か子供の時分から、豆ばかりが常食であつたといふ。イヤ、豆でなければ箸をとらなかつたといふ。今日の醫學界では、偏食はいけないとの定説になつて居るが、此患者にあつては、偏食も偏食、豆でなければ、絶対に口にしないといふのであつた。但し豆でさへあれば、其間に好悪はない。たとへば、大豆でも、小豆でも、隠元豆でも、蠶豆でも、鶉豆でも、黑豆でも等々。

此患者は二十三だといふのに、打ち見た處、ホンの十二三歳の子供にしか見えない。體軀は矮小、形容は枯槁、天日を見ざる蒼顔であつた。之を柳の下に立たせたならば、人は幽鬼と思ふかも知れない。

精神病の外に肺患もあつて、其爲にたふれたと記憶する。

豆ばかりを食ふ患者、豆でなければ物を食はない患者
私の病院二十九年間の存在、そこに何千人の入院患者があつたか知れないが、かうした患者は、蓋し稀有に屬する。

狂人は斯く訴ふ

精神病院を一度でも參觀した事のある人は、誰でも感ずる事であるが、方々の室から、患者がノソノソと出て来て、ウサン臭さうに人の顔を見詰めたり、不氣味なうす笑を口邊にたたへて、人の顔を偷み見をしたり、さうかと思へば、うつろな眼を開いて、ツカ／＼と寄つて來たり、それは何とも言ふに言はれぬ感じ、宛然たる百鬼夜行、正にグロバパーセントである。

私などは、始終かうした患者を見なれて居たのだから、それ程にも思はなかつたが、それでも同業病院を參觀の時などは、矢ッ張り薄氣味が悪く、自から鬼氣の身に迫るを覺えた。

私は曾て、幡ヶ谷の井村病院を參觀した。その時。三十五六の大年増が、ツト私の前に立ちふさがつた。そして、

「此病院では、チットモ烟草を喫ませてくれませぬ。あなた院長に話して、喫まして下さいよ。一本でイ、ツテバサ。」

とせがむ。

「ハイ、院長さんに話してあげます。」

と軽くあしらつて、前に進む。すると今度は、左の室から、年の頃は五十左右、大入道然たる男が私をつかまへた。

「オイ、君は誰だい。警視廳の人かい。この院長を叱つてくれよ。食ひ物がひどいせ。」と訴へる。

「君おとなしくすると、院長さんが可愛がつてくれるよ。」

と言つて、第二關を切抜けた。

私は又曾て、王子西ヶ原の小峰病院を參觀した。ある室の前で、窺突たる麗人が私をつかまへた。

「如何して私をこんな處に監禁するんですか。それでイ、と思つて居るんですか。」

とキリ／＼と柳眉を釣り上げたものだ。

私は又曾て、龜井戸の加命堂腦病院を參觀した。此時は中年の男、それも、政黨の院外團とでもいつたやうな人相の險惡な男が、私の襟首をつかまへて、グツと睨めつけた。そして案内者の院長奈良林淺次郎氏（今は故人）に向つて、こんなことを言つた。

「院長さん、コンナ奴、ちつともこはがる事はありませんよ。私が付いてますよ。コイツ檢事です。」

可愛いもので、院長に威勢を付けて、外來者の私をヤツ、ケたつもりであつたらう。私はその時、フロックコートを着けて居たので此患者から檢事と推測されたのであつた。私は、

「君、僕はそんなえらい人ぢやないよ。君達に上げようと思つて、御菓子をお土産に持つて來

たよ。」

と笑つて見せると、その患者は何かブツ／＼言ひながら、その手を私の襟首からはなした。院長は患者に向つて、「君そんな事をしちやいけない。」とでも言つてくれる事か、何も言はずに、ニヤ／＼と笑つて、私の側に立つて居た。

精神病院に隔離されて、世の中と交通の絶えて居る患者に取りては、見も知らぬ人が院内に入つて来るといふ事は、言ふ迄もなく、大なる衝動を興へる。獨り見知らぬ人とはばかりは限らない。患者の家族、たとへば、夫とか、妻とか、子供とかが面會に來た場合でも、相當の衝動を興へて、その感情を掻きみだす。

精神病患者は、參觀人に對して、必ず院内に於ける日常生活の不平を訴へるのを常とする。これに依つて、いさ／＼か胸中の鬱積を舒べんとするのであらう。

併し此患者の訴へる事を、割引なしに眞に受けては、大變な間違ひになる。參觀者乃至、患者の關係者、見舞人などは、そこを能く考へないといけない。一例を言へば、「此病院の食物は

まづい」と言ふ。併し一日の入院料が、タツタ九十錢の公費患者であつたら、何でうまいものを食はせられた道理はないではないか。

參觀者が能く、

「あの病院は食物がヒドイさうだ。現に此間私がああ病院に行つた時、患者がそんな事を言つてこぼして居た。」

などと言ふのは、患者の言葉を鵜呑みにした勘ちがひに過ぎぬ。

私の病院の所轄警察署は、牛込早稲田警察署であつた。視察のために、署員が佩劍鏢々として入つて来ると、患者はその姿を見て、一齊にイキリ立つ。待遇が悪いつか、食物がまづいとかさうした事を訴へてやらうなどと考へる患者が、廊下にウヨ／＼と集つて来る。そして患者自らが、病勢を昂進悪化させる。

早稲田に、山田一隆といふ署長があつた。

私は或時、山田署長に向つて、

「あなた方が官服で御出で下さると、如何も患者が興奮すると思ひますが、何とか平服で御出でを願はれますまいか。」

と言つた。すると署長は、

「成程さうかも知れませぬね。」

と腕こまぬいて考へて居たが、その次からは、何時でも平服で來院された。

山田氏は、助長行政に理解のある良吏であつた。私は山田氏のかうした態度を、ありがたい事に思ふ。監督者と被監督者である。殊に精神病院といふやうな厄介な事業である。監督官廳から、鵜の眼、鷹の眼になつて、疵瑕を指摘し、微嫌を検按される段になると、一日と雖もやつて行けるものではない。

山田氏は、今滿洲國熱河省警務部長である。切に好在を祈つてやまぬ。

見舞による衝動

私は前項に、患者が參觀人見舞人に依てショックを受け、そのために、一時興奮状態に陥る事を一言した。

それは事實である。

私の病院に起つた出來事。

入院中の妻を見舞に來た夫があつた。物の三十分も経過すると、女は悲鳴をあげる。男が怒號する。亂痴氣騒ぎだ。犬も食はない夫婦喧嘩を、處もあらうに、精神病院の面會室で始めたのだ。掛りの者がそこへ駆付けて、まあまあと雙方をなだめて、さてその様子を聞て見ると、男は、

「もうこんな奴は、如何なつてもかまひません。私や子供たちが、こいつの爲めに、どんなに

苦勞して居るかチツとも分つてくれないのです。あんまり我儘を言ふので、ナグリツケてやりました。」

と男泣きに泣くのであつた。

その男は、やがて、

「もう金輪際こんな奴の見舞になんぞ来るもんか。馬鹿々々。」

と最後の捨臺詞を残し、憤然として病院を辭した。

私は今でもその男が、病院の玄關から正門までの檜の並木の下を、心持ち左の肩をあげて、

昂々然として歸つて行つた後姿を忘れる事は出来ない。精神病院ならではの見る事の出来ない

珍風景と言つてよからう。

日本橋の商人の娘が入院して居た。

或日の事、その娘の母が見舞に來た。物の一時間も、しめやかに話をして居るうちに、何だ

かその母の様子が怪しくなつて來た。突然立ち上つて、ゲラ／＼と笑ひ出した。そしてその娘

を殴打した。娘は聲をあげて泣き出した。立會の看護婦は、驚いてかくと醫員に報告した。

醫員が精神鑑定を行つたところ、それは立派なキジルシであつた。

娘を見舞に來た母は、そのまゝ病院に入る事になつた。

何といふ悲惨事であらう。これも精神病院ならではの見られぬ珍風景である。

尤も此實例に見る場合は、入院患者が、見舞人の爲めにシヨツクを受けたのではなく、見舞

人が入院患者の爲めにシヨツクを與へられた分量の方が多かつたのかも知れぬ。

精神病醫に聞て見ると、夫が氣狂ひになつたが爲めに、妻が氣狂ひになる場合、妻が氣が狂

つたので、夫が氣の狂つた場合、親が發狂したので、子が發狂した場合、子が狂人になつたの

で、親も狂人になつた場合は、澤山あるさうである。

患者に同情したり、患者の事で頭を痛めて、心身を疲憊させた事が、その原因になつて居る

とは言ふものの、所詮は、其人も精神病患者になる素質を持つて居たが爲めではあるまいか。露

西亞の小説などにも、こんな風なのがあつたのを記憶する。

考へて見れば、人生に於ける悲惨中の悲惨である。
かういふ風に、精神病が甲から乙に傳はるのを、交換性精神病と唱へる人がある。

地下の黄金

精神病者の描く妄想は千差萬別である。

私の病院にこんなのがあつた。

それは玄關前の松の木の根方から、四方に三十歩の處を掘ると、大甕に入れた大判小判がザク／＼と出るから、一つダマサレたと思つて掘つて見る。現にこの病院から餘り遠くもない喜久井町の由井正雪の屋敷跡に、小判の出たためしがあるではないか。掘つて見る。掘つて見ると、吉川英治の大眾小説みたいな事を、口癖の様に言ふのであつた。

院長の顔を見ても、醫者の顔を見ても、誰れ彼れの正別なく、朝から晩まで人の顔さへ見れ

ば、此キマリ文句を繰り返す。

最後には誰れもがウルサクなつた。一つ本人の氣休めの爲めに、掘つて見せる外はあるまいといふ事になつた。

或年、残暑のデリ／＼と身に迫る日であつた。病棟まへの百日紅の幹には油蟬がデイ／＼と啼いて居た。三人の看護人と二人の雑役夫は、患者の指揮の下に、汗ダクになつてシヤベルを振つた。

看護人は、

「もうイ、だらう。こんなに掘つても大甕が出て来ないんだから、イ、可減にあきらめた方がイ、ゼ。」

と言ふ。雑役夫もそれに應援する。併し患者はイツカナ承知しない。

「まだだよ、まだだよ、もう少し掘ると出て来るよ。」
と頑張るのであつた。

結局、物の五尺も掘り下げた。その時である。何かカチンとシヤベルの先きに突き當つたものがある。それは一個の大石であつた。これを見た患者は、黄色い聲を張り上げて、

「おゝそれだよ。その石の事だよ。みんな君達にやるよ。」

こんな事を言ひながら、サツサと病室に引上げて行くのであつた。

看護人も雑役夫も、思はずホット五色の息をついた。泣くにも泣かれぬこの一幕、精神病院ならでは見られぬ珍風景である。

X

X

X

地中に黄金の埋藏してあるのを夢み、それを發掘して、成金になつてやらうなどとたくらむのは、何も精神病者に限つた譯でもない。正真正銘の眞人間にだつて間々ある事だ。

私はその一例として、故子爵水野直の事を挙げたい。

水野は人も知る如く、一時は政界の名物男であつた。

彼は舊結城藩主水野忠愛の後である。名門出の故を以て、法科大学を卒業すると、貴族院議員と爲り、籍を研究会に置いて小笠原長幹、青木信光と合せて三羽烏とうたはれ、そのころ相當に巾を利かせたものだ。

彼は先天的に鬪争性を藏すと言はれた。従て彼は、鬪争の爲めに鬪争を敢へてした。彼が御大典で京都に行つた時でさへ、一日として政治的活動をやめなかつたと言はれる。誰れ一人として、彼がヂツとして、宿屋に坐つて居たのを見た事がないと云ふ。京童の傳ふる處によれば、彼は毎晩々々、スツポリと頭からマントをかぶつて、自動車を走らせ、その中で睡眠を取つて居たと云ふ。

彼はその動作を人に知られる事を好まなかつた。深夜の訪問、裏門の出入はその最も得意の壇場であつた。だから、兎には三窟あり、水野には、それ以上の秘窟ありと笑つた人がある。

徳富蘇峰翁は水野を評して、

「子は政治家ではなかつた。何ぞ況んや經世家をやだ。然も多量なる政治家的素質の持主であつた。その人を丸め込む手管、排難釋紛の手腕、四角のものを丸く纏むる手際、何れも鮮かなものだ」

と言はれた。以てその人と爲りを知るべきであらう。

その水野に、こんな話があつたと聞く。

それは日獨戦争のころだ。彼は池袋にある或神様を信じて居た。獨逸の飛行機が飛んで来るから、帝都を信州の戸隠山に遷せとのお告げであつた。彼はそれを信じた。又舊領結城々趾の或地點に、二十五億の金が埋めてあるとのお告げであつた。彼はそれを信じた。そして多くの入夫と費用とを掛けて、地下何十尺を掘下げた。

そして、その結果はといふと、黄金どころか、赤錆びの針金一本も得ずに、空しく世人嘲笑の中に、幕を閉ぢたとある。

陰謀政治家と言はれ、暗黒政治家と呼ばれ、マツチとポンプの持主だと歌はれた政界の惑星

その水野直の生涯に、こんな話のあつたといふのも頗る奇抜ではないか。

だが併し字内は廣い。水野に、も一つ輪を掛けたやうな話がある。

話は今から六百年の前に遡る。成吉思汗は、モハメット王を亡ぼし、中央亞細亞を征服した。そして、奧蒙古の和林を首都と定め、こゝに金銀珠玉を鑲めた大宮殿を建てた。この大宮殿は、四方數里に渉るもので、成吉思汗の一代には出來上らず、三代の後になつて、漸く竣工した。かくて時人は、世界の黄金城と名けた。然るにである。

この世界の黄金城は、一夜、忽焉として夢の如くに消えた。

これは一體如何したといふのか。恐らくは、大震災の爲めに、土地が陥没し、その上を、沙漠の沙が蔽ひ隠したのであらう。

それからである。

英、米、露の物慾の權化みたいな人達が、入りかはり、立ちかはり、血眼になつて、心臓の

血を高ぶらせながら、沙漠の沙を掘りはじめたのは。
併し唯物萬能の彼等の前には、天も思ふ處ありてか、未だ黄金城の片鱗すらも現はしてくれないのである。

私は繰返して言ふ。古來の傳説を信じて、鑛山以外のところに、黄金の埋藏物を發掘しようなんて考へてる人のあるのは、何も精神病者のみに限つた事ではないと。

深夜の自動車

私の家の門前で自動車の警笛の音がした。その聲で眼が覺めたのは、眞夜中の二時であつた。續いて深夜の寂寞を破るケタ、マシイ電鈴の音、今ごろ誰れが來たのか知らんと、氣を腐らせて居ると、そこへ下婢が來て、

「おそろしい見幕の方が三人連れでお出でになりました。」

と言ふ。手には名刺さへ持つて居ない。

此深夜に、イキマキ切つて面會を要求するといふのは、斷じて唯事ではない。何か曰くがあるに違ひない。

私は三人を應接所に通し、一刻も待たせずに面會した。

見れば何れも緒鬚蓬髮、六尺豊かな巨軀の持主であつた。そして眼光炯々として、一齊に私を見詰めた。

私は來意を尋ねた。すると此中の一人が、

「サツキの男と違ふぢやないか。君は本當に院主かね。」

と鋭い横柄な一矢を放つた。

イキマキ切つた深夜の訪客、これ位の手剛い挨拶を受けるのは、元より覺悟の前だ。

「サツキの男とは誰れの事ですか。僕は君達に一度も御目に掛つた事はないが。」
と應酬すると、三人は口を揃へて、

「今日午前に病院で逢つたのは、院主ぢやあ無かつたのかなあ。」
と如何にもウサン臭さうに言ふのであつた。

「どんな人でした。」

と尋ねると、コレ／＼の風采の人であつたと答へる。

「それは多分病院の主事でせう。あなた方が勝手に院主だとお考へになつたのではないですか。」

と言ふと、三人は、

「そんな事は如何でもイ、よ。君が院主なら改めて言ひ度い事がある。」
銚先き鋭く私に詰寄つた。

「よろしい。どんな事ですか承はりませう。」

「言はなくつて如何するものか。」

と三人が卓を叩き、唾を飛ばして語る處を聞けば、

彼等三人の知人のAが、私の病院に入院中に死んだ。その死體を引取りに來た人の話によると、死體の臀部に大便が付着して居たさうだ。何故綺麗にそれを拭き取らなかつたのか。病院としては實にヒドイやり方ではないか。死者を侮辱するのも甚しいではないか。死者を侮辱するのは人道問題ではないか。我々は此始末を付けて貰ひに來たんだ。君は院主として如何いふ形式でその責任を果さうとするのか。

先づかういふ内容であつた。私は、

「御説の通りでしたら、まことに不行届千萬申譯がありません。」
と答へると、

「申譯がないと思ふなら、責任を果せばいいぢやないか。」
と逆襲するのであつた。私も少し面倒臭くなつて來た。

「一體私に如何せよと言はれるのか。端的に率直に、隔意のないところを伺はふぢやありませんか。」

とヤツツケた。そして彼等の顔色を伺つた。すると一人が、

「院主は話がわかる。此方から切り出さうぢやないか。」

と言ふと、他の二人も無言でうなづくのであつた。

彼等の出した最後の切札は、

「死者に敬意を表する意味で、院主自らが花輪を持つて、私の家に来て死者を禮拜じて貰ひたい。僕等はそれだけで満足して、此問題を打ち切らうぢやないか。」

といふのであつた。私が、

「イヤよくわかりました。御要求通りに致しませう。」

と言ふと、三人は来た時の傲慢横柄の態度をサラリと捨てて、

「深夜に御坊げしました。恐縮です。」

と挨拶して、私の家を辭した。

そのあくる日、私は大きな花輪を抱へて、麻布の或町の指定された家を弔問した。そこには

前夜の三人の中の一人が居た。

そして私が歸る時に私の後から、

「あれだけの大きい御事業ですから、御苦勞も容易ではありませんな。」

と、アツサリと御世辭を浴びせかけた。

深夜の訪客、面會要求、傲慢不遜な三人の荒くれ大男。

かう書いて見ると、何だか暴力團のやうにも聞える。或は暴力團であつたかも知れぬ。氣概の昂々たる彼等の事だ。腕力も相當に強いであらう。私と會見の一幕に於ても、或は暴力を發揮しないとも限らなかつた。

が併しその夜は、さうした場面に至らずに済んだ。

風は樓に満ちただけの事で、山雨は遂に至らなかつたのである。

あれから相當の月日の流れた今でも、私はあの三人の大男に、チリ／＼と詰め寄られたその夜の光景をおもひ出す。

X

X

X

患者の取扱ひに手落ちがあるといふので、攻撃の矢を向けられる事は、何も精神病院に限つた事ではない。併し何と言つても、さうした場面に出逢ふ数の多いのは、矢ッ張り精神病院であらねばならぬ。

狂人を相手とする處に、看護人の心に緩みを生ずるのではあるまいか。本來ならば、狂人なるが故に、猶更緊張して事に當らなければならぬ筈なのに。ここに精神病院經營者の不斷の悩みがある。

病室の書畫幅

私の病院に特等室といふ一棟があつた。純日本風の建築で、どの室も十疊と六疊の二た間つ

どきになつて居た。そこには、床の間もあれば違ひ棚もあつた。

この病棟には、比較的輕症患者のみを收容した。

私は患者の荒んだ感情を和げるには、床の間に幅物を掛けたり、楣間に額を掲げるのも、一つの方法ではあるまいかと考へた。院長も至極よからうと言ふ。そこで試みに特等室だけにこれを實行した。

花卉の幅などが床の間に掛けてあつたりすると、何となく、精神病院のみが持つ殺風景な氣圍氣を、幾分でも緩和するかのやうに感じた。

その結果は如何であつたか。

私は患者の言葉を借りて説明しよう。

ある患者は言ふ。

「ヘン糞面白くもねえや。この繪が如何したつてんだい。馬鹿野郎奴。塗りつぶしてしまへ。嵐は荒んだ。私が心づくしの甲斐もなく、あはれや尾竹竹坡の柳條飛燕の一幅は、完全に狂

人の手で塗りつぶされてしまった。

何時だつたか、京都に清原某といふ畫家があつて、何度も何度も帝展に落選の憂き目を見た。氣も心も荒み果てて、前途に希望も光明も無くなつた彼は、帝展へ出掛けて、大家連の製作を、ヤツツケロとばかりに、片つ端から墨汁で塗抹したのを思ひ出す。

ある患者は言ふ。

「院主さん、僕はこの繪を見ると、何だか不愉快になるよ。早くはづして下さい。一體この乞食坊主は何ですか。」

それは私の親友で、今は世に亡き畫家の本方秀麟の描いた寒山拾得の繪であつた。秀麟は俳畫を善くし、俳句に長じ、これを以て世に著聞した。併し狂人に取つては、一顧の價値も無かつた。

ある患者は言ふ。

「この虎の繪は中々うまく出来てるよ。こいつを見ると元氣が出るぜ。僕が退院する時に貰つ

て行くんだ。」

この患者は、日本橋四日市の商人で、江戸ツ子氣質のキビキビした人であつた。所望のまゝに、私はその人の退院記念に、鬚斗を付けて、この一幅を贈つた。

以上はほんの一事例に過ぎない。花卉の繪一つでも、甲の患者と乙の患者では、自らその感得する處が違ふ。必ずしも一樣に律する譯には行かぬ。

甲の患者の心を和げるものも、時としては、乙の患者の心を暗くするのであつた。

六かしきものよ。爾の名は精神病者である。

自制する患者

學者の説によると、元來酒の成分には、人の精神機能を狂はす處の酒精を包含する。それが一度體內をめぐる、先づ感覺に異狀を來たし、それから了解感情、判斷、記銘等に異狀を

来たすやうになる。要するに脳細胞と聯合神経繊維の働きが鈍くなつて、統一がとれなくなるからだといふのである。

酒は俗に言ふ氣狂ひ水だ。ドンナ人でも、一度酒を飲めば五官の調子がちがふ。昂奮する者悲観する者、十人十色、所謂、笑ひ上戸、泣き上戸、怒り上戸の出で来る所である。

そして、その昂奮程度の最もヒドイのを酒亂といふのである。

酒亂！

一例を擧げて見ると、ここに温厚謹嚴の人があつたとする。シラフの時には人の前に出ては碌々口も利けないといふ程度の内氣さであるが、さて一度酒が体内をめぐると、五官の調子がガラリと變つて、一舉手一投足が如何にも荒々しくなる。さうして居るうちに眼がすわつて来る。人を罵る。人かららむ。人に因縁をつける。人をなぐる。かうした調子になつて来る。能く酒宴の席などで、平生の鬱血を散ずるんだなど、言つて、人に不平を並べ立てたりするのがある。平生餘り好感を持ってぬ人が、その座にでも居れば、それこそ百年目だ。自分の前にある

皿小鉢や食膳を抛り出す位の事は、朝飯前の藝當だ。

學者の説によると、酒亂は病的酩酊であると云ふ。たとへば、牛乳や鶏卵その他の食物によつて、急性中毒を起す異常體質者があつたやうに、アルコールに對して、異常過敏な體質者が發する特異症だといふのである。

も少し詳しくいふと、アルコールの作用で痲痺が起り、その人の内體に潜在する病的缺陷があらはれて來るのである。

殊に疲勞とか、不快感情とかが誘引になつた場合には、その酒量の多少に關係なく、飲酒の結果、意識が朦朧となり、苦悶性の感情、幻覺、妄想などが起り、或は興奮状態と爲り、或は憂鬱状態と爲り、遂には殺人、傷害の犯罪にまで進むやうになるといふのである。

かうした病的酩酊—酒亂—は、次の二つの場合に起るといはれる。

(一) 先天的の場合

1 癲癇性性格者

2 變質者

3 意思不安症

4 體質性興奮症

5 ヒステリー性格者

(二) 後天的の場合

1 慢性アルコール中毒者

2 外傷性精神病

3 躁鬱病

4 早發性癡呆

兎に角酒を飲めば、良心、克己心、自制心が無くなるのは事實だ。無くならない迄も減少するのは争はれぬ。俗に酒を飲めば氣が大きくなるといふのは此事だ。酒なくて何の已れが櫻かなである。

私の病院に、次に語るやうな酒亂の患者があつた。

もう直つたといふので退院する。自宅に歸れば、又直ぐに飲む。あばれる。狂ひ出す。そして又入院する。かういふ事を、何度となく繰り返した。

此男は、或る日コスモスに秋雨のそぼつのをながめながら、病室の窓にもたれて、しみくと考へた。

「俺も一かどの商人だ。女房子供もある身空で、こんな氣狂ひ病院の一室に半年も一年も閉ぢ込められて居るなんて、ほんとに馬鹿々々しい話だ。こんな事をして居たら、俺の家の屋根には、ペン／＼草が生えるかも知れぬ。俺も今度退院したら、サツパリと酒と縁を絶たう。」

そしてはらくと落涙したのであつた。悔悟の念が起きたのである。

だが併し此男も醍醐の道には遠い凡夫であつた。一度家に歸れば、決心の臍を決めた道念も、何時しか春の淡雪と消えて、天の美祿だとばかり、朝から晩まで酒盃に親しんで、その情のゆく處に任かせたのであつた。

それから五年ばかり経つて、此男は眞實に覺醒するの時が来た。

「俺も段々年をとつて来る。いつまでもコナ馬鹿をつくして、妻子を泣かせても居られな
5。」

深い――自責の念に打たれて、心機はこゝに全く一轉したのである。

それなら此男は、如何なる方法に依つて、此決心を實行しようとしたか。

此男は酒を飲みたくなると、サツサと病院に駈付けて、

「一日だけ入院させて下さい」

と言ふのであつた。こゝで一日間をジツトこらへて、翌日は退院する。

此やり方は、此男に取りて、頗る効果的であつた。大酒をやつて半年も一年も病室に呻吟するといふ様な事は無くなつた。

かうした自制心、克己心が涌いたが爲めに、酒亂の大酒徒は、シラフの常人に返つた。

浪花ぶし語りの言ふ酒亂狂暴、虎、狼の連中でも、此男のやうな心境になれば、そこに救

はれる一筋の道に横はつて居る。

だから、必ずしも酒癖の人と限らず、たとへばモヒ中毒の患者などでも、自制心と克己心があれば、或程度までは、これを征服する事が出来ると思ふ。

酒 鬼

明治三十年十月十八日、私が東京府第四中學三年生の時、日光に修學旅行が行はれた。當日は東照宮見物、十九日は裏見、華嚴の二瀑布及中禪寺湖見物、二十日は霧降觀瀑の上、歸京との豫定であつた。

二日目の十九日に、私達のグループが豫定の通り、裏見、華嚴の二瀑を見て、中禪寺湖に至つた時、後から駈け付けた連中に依て、驚くべき飛報に接した。それは同級の石井克身が、無謀にも裏見の瀑の傍の楓の木に攀ぢ上つて、その一枝を手折らうとした。楓はもろいものであ

る。足がかりの枝が、ポツキリと折れて、アツといふ間に、瀧壺に落ち、頭蓋骨を粉碎して即死したといふのであつた。そして、それを目撃した連中が、呆然として失心せる矢前に、同級のCが、勇敢にも瀧壺に下りて、流血淋漓たる石井の死骸を引上げ、シツカリとそれを背負つて、日光の神山旅館を指して引歸したといふのであつた。私達は匆々として山を下つた。

こんな不慮の出来事があつたので、旅宿に歸つた私達は、謹慎禁足を命ぜられ、翌二十日は霧降觀瀑も沙汰やみとなつて、東京に歸つた。

Cが流血にまみれた石井の死骸を背にし、燃ゆるが如き落暉を帯びて、山を下つた勇姿は、如何にもヒロイックに見えた。其勇其俠、満校の讚嘆を博した。日光の町の人達が、Cの爲に喝采をおくるのを忘れなかつた事は、申す迄もない。教諭西村豊先生は、石井の爲に傳を立てその末に哀辭を作つて、「使其不結實、何爲生此苗、天耶將命耶、晃山風蕭々、背瀑水冽々、永使人魂鎖。」と言はれた。石井の死や悲しむべし。されども、先生がこの文中に、一言一句も、叙してCの英雄的行爲に及ばれなかつたのは、當時私の甚だ物足りなく思ふ所であつた。

Cは後に第二高等學校に入學したが、一年ならずして學を廢した。それから、Cの消息は絶えた。

X X X

大正十一年の春、私は或日、看護人志願の書類に眼を通して居ると、その中にCの名前があるではないか。私は暫く自分の眼を疑つた。恐らくは同名異人であらうと思つて履歴書を見ると、正しく當年のCである。やがて相見るに及んで、ヤア〜とお互に驚きの眼を見張るばかりであつた。Cは、

「君の病院とは知らずにやつて來たが、實に面目次第もない。」
と頭を掻いた。段々様子を聞いてみると、學校を罷めてから、家事の農業をやり、後では陸海軍の御用商人ともなつて、一時は榮えた事もあつたが、今では全く身の振方も付かない破目に陥つたと述べた。私はいくら何でも、舊友のCを、看護人にする譯にも行かないので、思案

にくれたが、Cが、

「何年振かでも偶然君と出會つたのも、前世の因縁事だと思ふから、是非君の處において貰ひた

S。」

と言つてきかないので、已むなくCを看護人に迎へ、間もなく賄部に移し、やがてその主任に擧げた。

X

X

X

賄主任としてのCは、實に適材適所であつた。長い間の御用商人の経験が役に立つたのである。物資の購入などは、細心緻密、至れり盡せりであつた。Cは献身的に能く動いた。Cが私の片腕にならうとの気分は、十分に讀めた。

唯困つた事には、Cが大酒家である事であつた。昔佐藤一齋が學徒を誡めたやうに、飲酒發狂の程度であつた。イヤイヤ浪花節語りの言つてるやうに、一度酒を飲めば、Cは全く虎狼と

化するのであつた。元來院内に起臥する百名に近い職員は、是れまで、絶對禁酒を勵行して來た。三百五十人の患者を收容して居る病院の職員が、飲酒の結果、思ひも寄らぬ間違でも惹き起したら、如何するといふのか、絶對禁酒は、職員服務規律の大原則であらねばならぬ。然るに、Cはそんな事にはおかまひなく、盛に飲酒をやる。飲酒のはては、言語も動作もまるで別人となつてしまふ。朝の九時から晩の七時まで、賄室に大の字にフンゾリ返つて、駟聲雷の如しといふ日が續くやうになつた。

私も、これにはほと／＼手を焼いた。Cは私の舊友である。而かも、今では、私の片腕と爲つて、眞劍に私の事業の爲めに盡くさうとの覺悟を持つて居る人である。さりとして、Cだけを特別扱ひにして、亂行爲を默認するといふ譯にも行かぬ。若しさういふ事になれば、院規は立ちどころに破れてしまふ。職員は私に對して、鼎の輕重を問ふに至るであらう。何分にも、内務大臣指定の東京府代用精神病院といふ表看板があつたゞけに、警察署、警視廳、東京府廳内務省と、二重にも三重にも、やかましい監督を受けて居る病院である。飲酒といふCの細瑾

が、その基を爲して、勢の及ぶ所、どんな奇禍を買ふに至るかも知れない。そこに私の大なる悩みがあつた。然るに、此軒聲雷の如きCは、一度酔がさめると、手をついて、しんみりとその罪を謝するのであつた。

「君と僕とは舊友だ。そんなにされては困る。マアマア手を上げてくれたまへ。」

と言ふと、Cはハラ／＼と落涙して、

「今後誓つて此過を繰り返しません。」

と眞顔になつて言ふのであつた。こんな事がおよそ八九回も續いた。

そこへ、大正十二年の大震災が起つて、世の中は殺氣立つた。Cは病院の爲めに盡すは此の時だと、夜叉の様になつて働いた。その奮闘は、實に血のにじむやうな、涙ぐましいものであつた。私は泣いてCに感謝した。但しこのごろのCは、誰れに遠慮もなく、大ビラに飲酒をするのであつた。兎に角、今は非常時である。殊にあれだけの働きをするCの事だ。今は仕方があるまい。私はこんな風に考へて居た。

すると或夜十二時過ぎの事、私が院の内外を警戒して居ると、泥籠のやうに正體もなく酔ひつぶれたCが、大八車に、荒縄で十重二十重にくりつけられて、十數人の自警團の連中に依つて、ワツシヨ、ワツシヨと病院に送りこまれた。何といふ淺ましい姿であらう。私は思はず眼を蔽ふた。

その翌日は、病院の何處の隅にも、Cの姿を見る事が出来なかつた。私に逢ふのがつらくなつて、Cは永久に、私の懐を去つたのである。

X

X

X

Cが私に何も告げずに、病院を去つてから、四年目の昭和二年の秋、私は仔細あつて、病院の經營をやめてしまつた。私はCを見ざる事、星霜こゝに十一年、すべては昔の夢となつた。Cは感性的の男であつた。Cには血もあり、涙もあつた。Cは友として、五分の俠氣を備へて居た。Cは人情の眞締を解した。Cは酸いも甘いも噛みわけた眞實の苦勞人であつた。若しC

が酒亂で無かつたならば、私の病院は、Cに負ふ所が頗る多かつたであらう。併しこれは盧山の一面觀であつて、元來Cに望むべき事ではなかつたかも知れぬ。仔細は、Cが酒亂であつたればこそ、水草を追つた放浪の果を、ゆくりなく私の病院に於て相見た譯である。だから、私がCと相獲て歡んだのが、ホンの束の間であつたのも、又當然の歸結であらねばならぬ。

昭和三年の眞夏、私が碑文谷に住した頃、ある日、私の弟が外出先から歸つて來て、あわただしく、

「今日省線が目黒で、Cさんが汗だくになつて、ツルハシを振り上げて居るのを見たが、實に驚いた。」

と私に告げるのであつた。

果して、弟の見た眼に狂ひはなかつたか。

Cよ何處に行く。

飲酒禮讚の詩歌は、昔から我國にも支那にも澤山ある。唐の杜甫の飲中八歌仙や、我國の藤

田東湖の瓢兮歌、萬葉の大伴卿の讚酒十三首などは、先づ此の中の白眉といつてよからう。その大伴卿の歌に、

あなみにくさかしらをすと酒のまぬ人をよく見ば猿にかも似る

この世にし樂しくあらば來ん世には蟲にも鳥にも吾れはなりなむ

生るれば遂にも死ぬるものあればこのよなる間はたぬしくをあらな

などいふのがある。諷誦一過、どことなく、酒を享樂するといふ感じがあらはれてゐる。

併しわがCの場合では、そこに享樂といふやうなユトリは無かつた。思ふに、爲る事爲す事みな敗れ、縁あつて、浮草の根を暫らく私に寄せたCにとりては、一刻でも一瞬でも、酒がなくて生きて行かれない程、セツパ詰まつたかなしい心境であつたのであらう。

松 問 答

病院の特等室の十畳敷、私の親友たる患者Aは、床の間を後にして、仙臺萩の千松のやうに、お膝にちやんと手を置いて正座して居る。Bは私、時は眞夏、庭を限る土手には、小松が行儀よく植ゑならべてあり、百日紅が可憐な花を着けて居る。

A「僕はこの土手の松を眺めて居ると、不思議に気が清々して落ちついてくるよ。」

B「そりやあい、君の病氣が松で癒れば結構だ。」

A「イヤあの松で、確かに癒る確信はあるよ。僕はこれから毎日、一生懸命になつて、あの松とニラメツクラをするんだ。かう丹田に力を入れてね。」

B「さうしたまへ。」

A「君、松づくしつていふ歌があるね。歌ひはやせやつていふ奴さ。九つ小松を植ゑならべか。此土手の松は全く歌の文句通りだよ實にいいね。」

A「さうく、こん小松の木かけにとか何とかいふのがあつたね。あれは君。長唄かい、清

元かい、それとも常磐津かな。」

B「越後獅子、あれは長唄さ。」

A「もつと外に、松の文句のいいのはいないかね。」

B「あるとも、大ありさ、松立てて門に匂ふや梅が香のなんて、粹で高等な小唄があるぢやないか。」

A「もつとないかい。」

B「あるよ、歌澤に、松の緑、松の花、松葉巴、松の操、松がさね、松葉ゆかた、松は唐崎松風、松、松の壽、松になりたや、どれもこれもイ、文句だよ。」

A「さうかな、そんな事を聞くと、久しぶりで、イ、音メでも聞きたくなるなあ。」

B「君が癒つたら、一つ大に祝盃をあげようぢやないか。」

A「ありがたう、併し君は駄目だよ。男のくせに、一滴の酒も飲めないなんて、話せないからなあ。」

B 「君の全快祝ひの時は、僕だつて、清水の舞臺から落ちた積りで、羽目をはづして左利きになつてみせるよ。」

138

A 「ほんたうならうれしいね。」

B 「それを樂みにして、一生懸命に松とニラメツクラをして、一日も早く癒りたまへ。」

A 「さうしよう」

X

X

X

私はこれを松問答といふ。

かうした松問答があつてから、二た月ばかりたつと、Aは全治を以て退院した。Aの病氣は大酒による一時的の精神混濁状態に過ぎなかつたのである。

Aは私の病院を出てから、ちやうど十年目に此世を去つた。

その間、私は屢々Aを訪ねた。Aもまた私の廬を叩いてくれた。

その十年間のAは、別にピントのはづれた處もなく、先づは普通の人であつた。

唯木の芽の綻び初める春さきの陽氣になると、何となく目付が變になつて、そはくと落付きがなくなり、そのあひまには、突拍子もない事を言ひ出して、私を面食らはせるのであつた。

たとへば、

「時に杉村君、安達峰一郎さんは如何して居られるかね。」

「安達つて、ドコかの公使をして居た人かい。僕は何も知らないよ。」

「だつて、君の伯父さんぢやないか。」

「安達が僕の伯父だつて、そんな事はないよ。君は何か勘ちがひをして居るんだらう。」

「さうだつたかなあ。」

かういふ調子であつた。

139

患者劇

私の病院の年中行事の一つは、患者の演ずる劇、春の観櫻會を兼ねての假裝行列、秋の陸上運動會などであつた。

所謂患者劇とは如何なるもの乎。

三百五十人の患者の中には、あらゆる職業人を網羅する。官吏、銀行員、會社員、ブローカー、辯護士、事件屋、新聞記者、學者、教員、學生、大工、左官、桶屋、墨屋、經師屋、代書屋、菓子屋、船頭、俳優、講釋師、落語家、畫家、書家、魚屋、八百屋、下駄屋、理髮屋、料理屋、湯屋の三助、鳶の者、幫間、藝者、遊藝師匠、娼妓、酌婦、待合の女將といった風に先づ一通りの者は揃つて居る。そして此連中には、フダンから、芝居好きの人も澤山居るのだから、村芝居じみたもの一つ位、やつてみてやれない事はなかつたのである。

彼等はよく舊劇の仙臺萩をやり、忠臣藏をやり、新劇の不如歸をやり、乳姉妹をやつた。

忠臣藏の場合には、舞臺の横に、誰れが書いたか、滑稽忠珍藏喜劇軍など、勘亭流に書いてあつた。

登場者も狂人、見物人も狂人、アウンの氣の合はぬ無表情な芝居を、ウツロな眼が一齊に見詰める。

張ぬきの鬘に、ボール紙の社袴といふ物すごい扮裝、衣裳、大道具、小道具、何れも彼等が精魂のあらん限りを打ち込んでの手細工ものであつた。

この劇の始まる一ヶ月も前から、毎日毎日、看護人も一所になつて、その準備に掛りつきりで一日も早くその日の來るのを楽しみにして居るのであつた。下座を引くといふ中年の女は、葎町の師匠上りで、朝から晩まで、夕ぐれと御所車のひき通しであつた。

此日は劇の外に、詩吟をする者もあれば、振事をやる者もある。講談や落語の眞似をする者もある。中には藝妓上りで、新富町の小玉さんにだつて引けを取りやあしませんよと、ハシヤ

イで居るのもあつた。

或時かうした劇の観覧中、浪子と武夫の別れの一段に至つて、一人の狂人が大向ふの彌次氣取で、ヨ一大統領などゝわめき立てゝ居るうちはよかつたが、頬張つた甘諸が咽喉につかへてそのまゝ冥土の旅へ立つたので、折角の芝居もメチャ／＼になり、中止になつた事がある。此患者は元は某省の官吏であつた。精神病院のみが持つ悲喜劇と言へるであらう。

かうした演藝には、患者自身がやる外に、たまには本當の藝人を呼ぶ事もあつた。分るのか分らないのか、時々拍手喝采をおくるのは、矢ツ張り魚屋藝術と言はれる浪花節の場合に一番多かつた。

今、世に著聞せる筑前琵琶の唐澤筑瑞さんなども、時々やつて來たものだ。私は今になつて考へる。狂人を相手にしての演藝、それはどんなに張合のなかつた事、薄氣味の悪い事であつたらう。

假裝行列

春の觀櫻會を兼ねての患者の假裝行列は、私の病院の呼びものの一つであつた。病院の玄関前に、牛込の櫻の王といはれる二本の楊貴妃櫻の大樹があつて、枝もたわわに咲き亂れる。

その春たけなはの一日を選んで、觀櫻會をやつたものだ。

その日は、團子屋、おでん屋、鮎屋、汁粉屋、甘酒屋の模擬店も出來、食ひ意地の張つた患者は、今日こそとばかりに、咽喉を鳴らし、舌鼓を打つのであつた。

患者で假裝行列に加はるのは、毎年百二十三人位、これに職員中の有志を加へて、百五十人位になるのであつた。二月も前から、精一杯の知能を絞つての晴れの舞臺であるのだ。

今、患者の打つ太鼓がドロ／＼と不氣味に鳴り響く。それは假裝行列行進の第一聲である。太鼓、笛、鐘の音を先頭に、足取り可笑しき定九郎、チャップリン然たる石童丸の珍妙な姿に

續いて、蜿々たる長蛇の行列が、さながら地獄繪巻の如く、我等の前に展開されたではないか。見よ。そこには加藤清正も居る。四十七士も居る。乃木大將も居る。東郷元帥も居る。兒島高德もあれば、楠正成もある。昔の鳥追や、手古舞姿の意気なものもあれば、當世風の女給や、モダンガールに扮したのもある。果ては、何處から探して来たか、あらめのやうな檻襦を身に纏つたおこもさん、巡査になる者、水兵になる者、力士になる者、宛然たる百鬼夜行、まことに奇想天外より落つるのであつた。

患者の假裝行列は、病院の呼びものとなつて、當日は澤山の參觀者のあるのを常とした。病院の關係者、所轄警察署の人たち、新聞記者、さては、物見高い近所の人達に至るまで、押すな押すなの盛況を呈するのであつた。

今、私の手許にあるスクラップ・ブックを繰り廣げて見ると、大正十年四月二十三日の東京朝日新聞には「狂へる三百名が花下の悲喜劇」、「戸山腦病院の觀櫻會」と題した寫眞入りの記事がある。その中に、「植込には蜘蛛手に張り渡した萬國旗が、はや散り初めた葩と共に、

るのを見上げながら、現なの笑を湛へて、ニタリと上眼使ひに、患者同志腕組合せて、歩き廻るのも憫れである」などと書いてある。

患者の芝居、患者の假裝行列、世間の人を見て面白いと言ふ。見て珍らしいと言ふ。一度は見て話の種にするものと言ふ。併し私はさうは思はない。見て面白いどころか、凄惨思はず面を背けしむるものがある。後の語りぐさにするどころか、何時までもおびやかされた悪夢となつて、百鬼夜行の醜態が、頭の隅にこびり付いて居るのを感じる。

狂人の芝居、狂人の假裝行列、およそ世の中に、これ位グロテスクなものはあるまい。白日の下、自ら鬼氣の身に迫るのも當然ではないか。

一體魂のないうつろな形骸を病室に横へて居るあはれな人達にする芝居なり假裝行列なりを見て、面白いといふのは、同情のないつめたい言葉ではないか。私は參觀人が多ければ多い程、惨酷な話だと考へた。

人の生涯は、基督に従つても、悪魔に従つても送ることが出来る、哲人トルストイは喝破

した。患者自身は何と思つて居るかそれはわからぬ。併しあはれた患者を大衆の前に觀せものにするのは、悪魔の道であるかも知れぬ。基督の言ふ愛の道、善の道ではないかも知れぬ。私は精神病院の經營者として、コンナ事をするのは、イケナイ事ではないかと考へた。イツソ來年からは、やめてしまはうかと考へた事も、一度や二度ではなかつた。併し院内に於ける大勢は、必ずしも私の一存ばかりで押し通す譯にも行かなかつた。

今だから白状するが、私はそのころ、つくづく精神病院の經營に嫌氣がさして居た。ちやうどその時、耳鼻咽喉の權威の岡田和一郎氏から、

「亞米利加風の共同病院を山の手に建てたいと思ふが、敷地がないので困つて居る。君の病院を郊外へ移して譲つて貰へぬか。場合に依ては、營業全體を買收してもいい。」

との相談を持ち掛けられた。私は患者の假裝行列の當日、コツソリ病院の喧騒をぬけて、麴町は三番町に、岡田博士を訪ねて、此事に關し、隔意なき意見の交換をして居たのであつた。後で私の居ないのに氣の付いた人たちは、

「院主さんは、何處に行つたらう。こんな面白い行列を見はぐつて。」
と同情じみた言葉を發したとの事であつた。

忘れ得ぬ患者

私の病院に居た患者は、前後何人あつたか知れないが、私の何とはなしに忘れられぬ患者が三人ある。

Aは伊豫の今治の商人の伴であつた。至つて靜かな患者で、一見して、何處に精神の異狀があるのかと思はれる位のものであつた。

Aは或時私をつかまへて、

「院主さん、私はもう何でもない積りですが、どんなものでしやう。早く國に歸つて、両親にも安心させたいと思ひます。處がおとなしくして居れば、憂鬱状態だと言はれますし、チレ

ツタクなつて、少しイラ／＼すれば興奮状態だと言はれますし、自分でも如何してイ、のかわからなくなります。エ、如何でも成れといふ氣になります。」
と述べた。

私はヒドク此デスベレートな言葉に打たれた。若しAの言ふ事がほんとうならば、その心境は、まことにあはれむ可しである。

私は早速Aの病状を院長にきいて見た。院長の答へは、全治に近いと言ふのであつた。間もなく、Aは郷里に歸つた。

郷里に歸つたAは、春秋のおとづれに、

「かうして國に歸つて、両親の膝下に安らかな平和な月日を送つて居ますのも、皆院長さんのお蔭です。此御恩は一生忘れません。」
と廻らぬ筆で、くりかへしくりかへし、同じ事を書いてよこした。

x

x

x

Bは東京帝大出の法學士であつた。そのころ私は、まだ法科大学の學生であつた。Bは私が法科の學生だといふので、ヒドク親しみを感ずるといふ風であつた。

Bは私が大學から歸るのを待ち兼ねて、病院から私の家に尋ねて來るのであつた。寺尾さんの國際公法は、大ザツバだから、あんなものを聞いたつて仕方がないとか、松波さんの商法の試験問題と來ては、やり切れない位に六かしい。あれで落ちる人が澤山ある。あれを氣を付けたまへなど、眞顔になつて言ふのであつた。

Bの病室は、六疊の離れ座敷であつた。庭には梅の若木があつた。
或冬の事である。

その日は、朝から小雪がチラ／＼降りしきつて居た。Bは何すともなく、その降る雪を眺めて居た。そのうちに、Bはスーツと頭が開け、心が開け、急に悪夢からさめたやうな氣持ちに

なつた。

Bの精神状態は、正常に復したのである。

Bは後日私にその心境を語つて、昔の名僧智識が、桃の花の開くのを見た拍子に悟りを開いたとか、ふと道の小石につまづいた瞬間に、靈感に打たれたとかいふ事を聞いたが、自分の場合も、ちやうどこれと同じやうなものではあるまいかと微笑した。

Bは退院後、その學び獲たる法律を以て、けはしい世の中に活動した。

X

X

X

Cは信濃の或町の町家の伴であつた。

昭和二年十月の事だ。私は仔細あつて、病院を東京醫學專門學校に譲渡した。

その時である。Cは私に面會を求めた。そして、

「私は今日かぎり、斷然退院して信州に歸ります。」

と氣色ばんだ。私は百方之れを慰撫すると、

「イヤデス〜、長い事院主さんのお世話になつたんですから、斷然醫專の世話などになりません。」

と頭を横に振るのであつた。

「そんな義理がたい事を言はないで。」

とすかしては見たが、私は何とはなしに眼頭の熱くなるのを覺えた。

私は患者も職員も現狀のまゝで、東京醫專に譲渡した。數ある職員の中には、私が特別に眼を掛けた者、息を掛けた者が澤山あつた。それらの者でさへ、東京醫專の鼻息を親ふに汲々として、掌を反へすやうに反眼を以て私を見た。「お前なんかにもう用は無いぞよ」と、ハツキリ之れをそぶりにあらはした人情輕薄、襟元につく世の中に、三百五十人の患者の中に、タツタ一人でも、私の爲めに、かうして別れを惜しんでくれる人があるのかと思ふと、感激の涌くのを如何する事も出来なかつた。

Cはそれから一週間ばかり、毎日々々、院内の枯れ木や、建築用材の古いのを集めて、一生懸命に薪を作つて居た。

私が愈若松町を去る時に、Cは、

「院主さんも、病院をおやめになりましたは、お暮らし向きも、自然これまでとは違ひませうから、こんな薪をつくりました。」

と言ふのであつた。私は泣くにも泣かれず、その純情に打たれた。

私とその眞心を容れて、大長持に一パイの薪をトラックに積み込んだ事は申すまでもない。

私は人情の眞諦を精神病者に教へられた。

街頭の噂

心理學者は、如何説明するか知らないが、人の心の奥底には、好奇心といふものが存在する。

スキヤンダルを耳にするのを好む癖がある。近代のジャーナリズムはそこをねらつて、面白半分に興味中心のものを書く。従つてその描寫は、誇大であり、擴大であり、大袈裟である。事實とは相距る事至つて遠く、時としては、煙のないのに火が揚がる。

詮じつめて見れば、根據のない街頭の噂さであり、裏屋住居の山の神連の、井戸端會議の毛の生えたものでしかあり得ない。そして、それが大衆の喝采を博する。

私は長い間、精神病院の經營に没頭したので、ジャーナリズムの御厄介になつた事も、一度や二度ではない。雑誌や新聞に、病院に關する興味中心の記事が掲載されるのも、言はゞ、年中行事みたいなものであつた。

そしてその記事は、前に言つたやうに、誇張であり、擴大であり、嘘と實とをこき交せてデツチ上げたものである事は申すまでもない。よく新聞記者などがヤツテ來て、事務員や看護人に逢つて、話を聞いて歸つて行く。そして翌日の新聞には、院主杉村は語るなんていふ風に書くのであつた。彼等は事務員や看護人を、眞實に私だと思つて居るのではない。彼の相手が事

務員であり、看護人である事を、百も承知の上で、是れを筆にする時は、院主に逢つたと書くのであつた。

従つて私の言はない事が、私の言つた事になつて居る。言責を負へない事が、ここでは言責を負はねばならぬ形になつて居る。萬事が此筆法で、私の迷惑は此上も無かつた。

大正十四年一月二十七日の夜の十時過ぎの事、私の病院の看護婦二人が、戸山の原をブラブラ歩いて居た。處は寂しい戸山の原であり、歩いて居るのは、年の若い女二人である。警官にとがめられて、取調を受けたが、結局仲のイイ二人が、非番を利用して、心行くばかりのそぞろ歩きでしかなかつたので、唯今後を注意されただけの事で、無事に歸院を許された。

ただそれだけの事實である。

然るに此事實が、翌々二十九日の東京の諸新聞紙上に、意外の記事となつてあらはれた。論より證據、私はその當時、切抜通信社から取寄せて、スクラップブックに貼り付けて置いた諸新聞の記事から、摩訶不思議の要處々々を摘記して見よう。

A 新聞は、美人の抱合心中と題して、

「十七八の妙齡の美人が、細紐で身體を結び合つて、線路の上に横はり、縊死を圖つて云々。」

「同人は、富山市富山病院看護婦×××××、××××と判明したが、二人は同病院に勤務中院長に脅迫されたので出京したが云々。」

B 新聞には、眞ッ裸の女同志鐵道心中（未遂）と題して、

「戸山腦病院の看護婦、×××××、××××と判明した。兩名は帯を解き、裸體となつて、線路内で抱合心中を圖つたものであつた云々。」

「原因は、同病院内の男患者から怪しからぬ行爲を強ひられたので憤慨し、兩名は次第に同性愛に陥り、遂に抱合心中を圖つたものである。」

C 新聞には、年若の二看護婦自殺を圖る、二人が胴體を結びつけてと題し、

「二人の婦人が、帯で胴體を結びつけて、飛び込み自殺を企てたのであるが云々。」

「原因は、兩人とも美貌のため、病院内で男から誘惑されたり、脅迫されたりするので、恐ろしさに堪へかね、兩人で自殺を企てたもので云々。」

「××××は断髪で、中々の美人である。」

D新聞には、死への道を辿る二人の看護婦、醫者仲間から脅迫されて、と題し、

「夜目にも麗かな二人の若い娘が二人、燃えるやうな帯紐で、しつかり身體を括り合せて鐵路に横たはつてゐるのを發見し、驚いて調べて見ると、娘達は富山縣立富山病院の看護婦で、××××、××××の同年の若い娘であつたが、美貌が仇となつて、幾多の醫師達の征服慾を唆り、日夜誘惑の甘言を呈され、或時は脅迫的に迫られるのを固く峻拒して居た爲め次第に虐待を蒙り、同僚からも美望と嫉妬の苛酷を加へられるので、二人は遂に語り合つて東京へ出て、立派な病院に入り身を立てようと、夢のやうな希望を抱いて、僅許りの金と所持品とを携へて、數日前飄然上京したが、故郷で描いた夢は、現實と餘りかけ離れて居るので、遂に所持金も使ひ果し、進退全く窮まつたので、ここに合意の上死を擇ぶ決心をし前記の場所で鐵路の錆にならうとした事を涙と共に語つたので云々。」

E新聞には、わかい看護婦二人が死を企つ、事務員に戀されて、と題し、

「若い女二人が、胴體を括り付けて、抱合心中を企てたもので云々。」

仲のいい二人の漫歩が、夜の十時過ぎであつたといふだけの事が、大いなる波紋を描いて、東京の新聞にあらはれた記事は、以上の如きものであつた。

一、此二人の看護婦は、美人などといふ柄ではなかつたが、ここでは立派な別嬪さんになりすまし、断髪でもないものが、モダン断髪の女に納まり返り。

二、牛込若松町にあつた私の戸山脳病院が、富山縣立富山病院に化け。

三、私の病院に、一年も前から勤めて居たものが、數日前に飄然として富山から出京したり。

四、ただブラ／＼と歩いて居たのが、二人で胴體を括りつけたり、又は眞ッ裸になつて線路の上に横たはつたり。

五、院主に脅迫されたり、醫師や男の患者に醜交をイドマレたり、事務員に戀されたり。

ジャーナリズムと云ふ不思議な傀儡師は、自分の思ふがままに、勝手に鬼を出したり、蛇を

出したりして、大向をウナラせて居るのであつた。考へて見れば、世の中はイ、加減なものだ。併しかうした話を、面白可笑しく、デツチ上げられた二人の看護婦こそ、イ、面の皮であり又病院の経営者たる私としても、何だか院規が紊れて、取締が付いて居ない様な感じを世間に與へてありがたくない。

そして、觀察の角度を換へて見ると、此二人の眞護婦は、相當に人格を傷けられ、名譽を汚された事になる。人の噂も七十五日、三年たてば空ふく風よといふ都々逸もあるが、さうばかりも、乙に済まして居られない場面もある。

以上は、私の経験したジャーナリズムの犠牲になつたホンの一例を書いてみたに過ぎない。看護婦の戸山の原の夜遊びなどいふ、ソんなケチ臭い問題でなく、それこそ病院の盛衰にも關する様なデマを飛ばされた事も何度もあつた。

その夜の松崎天民

私が松崎天民と相識るに至つたのは、國民新聞記者川村儀彌が、斡旋の勞をとつてくれたからである。

これよりさき、私がまだ警視廳に勤めて居た頃、知人の依頼で、警視廳の給仕に世話をしたのに、川村といふ俊敏にして奇骨のある少年があつた。然るに川村は、生れ付きの政治好ともいふのか、日比谷公園あたりに、何かゴタ／＼でも始まると、ソレツとばかりに、そこへ駆けつけるといつた風の、至つて血の氣の多い少年であつた。

後に私は川村を引かせて、私の病院の傭員に採用した。

この少年政客川村は、後には國民新聞の記者として警視廳詰と爲り、震災後に出來た警視廳の、あの長い／＼廊下を、肩で風を切つて濶歩する身分に爲つて居た。

その頃私は、已に亡父に代つて、病院を經營して居た。大震災の爲めに建坪約千坪の病棟が倒壊こそしなかつたが、完膚なき破損を蒙つた。元來が木造建で、改築期に達して居る處へ、あの大地震だから、一たまりもなかつたのである。

私は此修繕に莫大の金を使つた。元來修繕といふものは、それからそれと、イクラ金を掛けても、切りのないものだ。さうしてその結果から見ると、どこに金を掛けたのかと思ふ位に目立たないものだ。さうかと言つて、私は一時に病院を新築する程の金も持つて居らず、又あの急場に、さうした大金の融通の出来る道もない。已むなく片つばしから順々に修繕に取掛るの外に道はなかつた。

震災後兩三年の間は、私は經濟的にヒドク手を焼いた。

かうして私が氣を腐らせて居る處へやつて來たのが、國民の川村であつた。

私の述懐を聞いて、川村は、

「誰れか一人、文士でも引つ張つて來ようぢやありませんか。そして一つ提燈記事でも書かせ

て、景氣を付けたら如何です。」

と親切に言つてくれるのであつた。荊棘の蔓から葡萄の實を獲ん事は私の望むところである。

結局川村の周旋で、松崎天民が、此役を引受けてくれた。

天民は、院長加藤博士の談を、ノートに書き留めた。そして一わたり病室を參觀した。人生の探訪者として、世の中の表も裏も縦も横も、およそ知り盡して居る天民ではあつたらうが、流石に三百五十人の氣狂ひを目の前にして、異様の感に打たれたものか、眼を白黒させて居た。

私はその夜、天民と川村とを、神樂坂の旗亭新福井に招いて酒宴を催した。

元來牛込といふ處は、うまいものを食はせる料亭などはない處だ。曾て都新聞記者の平山蘆

江が、尾上梅幸を病院見物に引つ張り出して上げようかと、提案してくれた事があつた。梅幸

が病院を見物したといふ事になれば、それこそニュース・バリユー百パーセントである。およ

そ、これ位病院の宣傳になる方法は、外にあるまいと言ふのであつた。

その時、蘆江は私に向つて、

「梅幸を神樂坂あたりの料理屋へ案内して下さい。如何せ一流どこでさへ鼻についてる手合の事だから、ノテ料理なんて乙がるかも知れませんぜ。」

と一笑した。そして梅幸の男衆へは、これこれにして貰ひたいとの、色々の注意があつた。

私は蘆江の提案に對して、とつおいつ思案に暮れたが、結局梅幸とか、その男衆とかを取持てる柄ではない事を自覺したので、あたら蘆江の厚意を無にしてしまつたが、若しさうした事が實現するとしたら、矢ツ張り新福井へでも持つて行くの外に道はなかつたであらう。

私はその新福井へ、天民を案内した。

この女將は、長い事、矢の倉の福井に居た女で、ヤレ土方の御前が如何の、ヤレ何とか御前が如何したのと、ヤタラに矢の倉時代の風を吹かせて、まことに氣障な女ではあつたが、食ひ物だけはうまく食はせた。

かうして私は、淪落の女の著者、松崎天民と相對して酒を酌んだ。窓外には、新緑の雨が、しとくと降つて、私達の話を偷んで居た。

天民は、

「この料理は食はせますよ。」

と悦に入つて居た。後では京阪たべある記を書いたり、雑誌食道樂を經營した天民が、斯く言つたのだから、まんざらの野暮料理でもなかつたであらう。

天民は上々の機嫌で、能登和倉温泉旅行談を試みた。中には君子の所謂、耳を掩ふべき鄭聲を平氣でやつてのけた。私が笑つて居ると、天民は益興に乗じて、その猥談に拍車を掛けた。

天民は緒顔豊面の肥大漢で、黒眼鏡を掛けて居た。一見村役場の書記とでもいつた様な風貌の持主であつた。

が併し、更に邊幅を修めず、洒々落々として凝滞のない處に、言ふに言はれぬうま味があつた。胸中に城府を設けず、サラリと人に接するといふ垢の抜けた處が、天民の身上であらう。

私が天民から受けた印象は、唯好感の二字に盡きる。長谷川伸が天民を評して、大きな童と言つたのも、徳富蘇峰翁が天民を論じて、「大人にして赤子の心を失はず。」とか、「君は貧苦の中よ

り身を挺して出で來つた。然も其性情は、樂易、明快、毫も人生行路の惡戰苦闘者の如き態無かつた。と言はれたのも、畢竟はこの邊の事を指すものであらう。世には楯の半面を觀るとか、廬山の一面を觀るとかいふ諺もあるが、人の見方といふものは、先づ大體は、同じ處に落ちつくものだと思ふ。

天民は數本の扇子を取寄せ、妓の名前をよみ込んだ歌を作つて、その妓に與へた。私が、

「松崎さん、僕にも一つ記念に、何か書いてくれませんか。」と言ふと、天民が、

「さうですか。」と言つて、書いてくれたのが、

紅燈の
神樂坂よし

雨の夜を

さざめくもよし
新福井かな

天民

杉村先生惠存

の一首であつた。成程、その字は蚯蚓ののたくつて居る様な稚拙さであり、またその歌は、全然アマチュアの即興に過ぎない。併し天民のない今日になつて見ると、此まづい字、まづい歌が、却て言ふに言はれぬなつかしさを覺えて、率直なノーテ・ボーイの、その夜の一舉一動が、歴々として目睫の間に蘇つて來る。

畢丸有柄移植事件

大正十五年の五月に、私の病院で畢丸有柄移植事件といふものが起つた。これは世界の醫學界に始めての事だとあつて、世の物議を醸し、人の視聽を驚かせた。

此事件は、一年前の大正十四年の六月に起つた事で、看護人が警察署に投書したのに、端を發したのであつた。

さうして、院長醫學士谷口本事、慶應醫科大學外科部長、醫學博士前田友介の二氏は、東京地方裁判所検事局に召喚せられ、石田、竹平兩検事の取調を受くるに至つた。

然らば、畢丸有柄移植事件の真相は如何。

今これを當時の資料に依つて、各當事者の口を假りて述べて見よう。

一、看護人より所轄警察署への申立、

大正十四年六月、慶應の前田博士が病院に来て、谷口院長立會の下に、公費患者、A Bの兩人を一體に密着させて手術をした。すなはち、Aの腰部に、Bの右腕を縛りつけ、Aの陰囊を切開して、肉體から脱離せずに、畢丸に精系のついたまゝ、Bの右腕を切開して、その中に畢丸を移植し、兩人を密着させて、身動きもならぬやうに縛りつけ、十日間を経過させようとした。所が相手が狂人なので、注文通りに、ジツトおとなしくして居る筈はない。三日目には、細を噛み切つて、離れくになり、Aは死亡した。Bも本年二月に死亡した。Bの死體は、腦漿の一部と畢丸とを摘出して、引取人に渡した。

一、前田博士の釋明

Aは畢丸の内分泌の多いのが原因で、精神病者と爲り、Bは畢丸の發育が不十分な患者なので、Aの畢丸をBに移植するのが、一舉兩得の方法だと考へて、この手術をした。Aの畢丸を切取つて、Bに移すのでは、効果が少いから、有柄移植を試み、兩者を十日ばかり密着せしめてから、分離せしむる積であつた。死の直接原因は、手術の爲ではない。手術は已に動物試験

では成功して居るのだから、醫者としての治療範囲を出でなかつた事を斷言する。唯相手が、手術を承諾する事の出来ない狂人であつた事に對しては、徳義上責任を感じる。併し假に此事が問題となるやうなら、我々醫學者は、新しい手術には、一切手出しが出来ず、従つて日本醫學の前途に暗影を投ずるものだと思ふ。

一、谷口院長の釋明

畢丸有柄移植手術は、治療の爲の手術であつた事を誓つて聲明する。誠心誠意、奉仕的の氣持で患者に接して居たのだが、相手が狂人であるが爲めに、いろ／＼の誤解や疑惑を受ける。若し此事が、人道上の問題だといふなら、どんな制裁を受けても致方はない。

一、警視廳衛生部長川村貞四郎氏談

狂人を學術研究の爲めに犠牲にしたのならば、由々しい人道問題だ。従つて事實を明らかにして置く必要がある。その所置は、裁判所にお任せすべきである。

以上に依つて、讀者は、當時世を驚かした所謂畢丸有柄移植事件なるものゝエッセンスを掴ま

れた事であらうと思ふ。

患者をモルモットの代用にしたのは怪しからぬ。歐米各國でも、動物以外には施術した事のない新手術だから、これを無條件に肯定する事が出来るか如何かと云ふのが、此問題の重點であつたらしい。

そして、前田谷口の二氏は、死體損壞、又は傷害致死の罪名で、起訴されるのではないかと噂させられた。谷口院長は、此事件がやかましくなつた責を負つて、院長の職を辭し、醫學博士加藤普佐次郎氏が、代つて院長に就職した。

検事局に於て取調の結果、前田谷口兩氏とも、不起訴に了つた。この事件の起つた當時、某大新聞の記者は、私に面會を求めて、

「院主としての責任を如何するか。」と見幕鋭く詰寄つた。

「私は醫療の事は一切わからぬ。又院長がさうした事を醫者でもない私に相談すべき筋合でも

ない。従つて此事件のあつた事も、今度はじめて聞いた譯だ。これ以上の御答へは出来な

5.1

私は斯く答へただけであつた。

谷口學士は、私の病院に院長たる前に、新潟脳病院院長たる経験もあり、恪勤精勵、患者に對しても、常に細心周匝の注意を拂はれた。かうした事件の爲めに、私の病院を去られた事は當時、私の限りもなく恨みとした處である。併しその翌年の秋には、私も仔細あつて、病院を東京醫學専門學校に譲渡するに至つたのだから、考へ様によつては、谷口氏も、イ、潮時に身を引かれた事になるかも知れぬ。何れにしても、私は當時を回顧して、感慨無量である。

谷口氏は、今静岡縣代用精神病院たる沼津脳病院院長であると聞く。久しくその聲咳に接せぬ。切に君の健康を祈つて此筆を擱く。

戦争と精神病

戦争は多くの精神病者を發生すると云ふ。

これを統計に徴すると、

第一、普佛戦争の時（普國）

一八七〇年一月—七月	千人中〇・三七人
一八七〇年二月—一八七一年六月	千人中〇・五一人
一八七一年七月—十二月	千人中〇・五一人
一八七二年	千人中〇・九三人
一八七三年	千人中〇・三九人

第二、南阿戦争の時（英國）

一八九八年 千人中一・五一人
 一八九九年 千人中二・〇〇人
 一九〇〇年 千人中二・五〇人
 一九〇一年 千人中二・六〇人
 一九〇二年 千人中一・二〇人

第三、米西戦争の時（米國）

一八九八年 千人中一・一〇人
 一八九九年 千人中一・八〇人
 一九〇〇年 千人中二・七〇人
 一九〇一年 千人中一・八〇人
 一九〇二年 千人中一・〇〇人

第三、日露戦争の時（日本）

明治三十六年 千人中〇・三八人
 自明治三十七年二月 千人中一・一四人
 至明治三十九年三月
 自明治三十九年四月 千人中〇・三四人
 至明治三十九年十二月 千人中〇・四八人
 明治四十年

と云ふ事になつて居る。
 誰れが考へても、「身體精神の過勞たる戦争」には、精神病者を發生する事になりさうだ。

糧食不給
 睡眠不足
 極寒極熱中の戦闘偵察
 死屍を目撃しての感動

戦敗の場合の恐怖苦慮
梅毒による痲痺性癡呆
脚氣に依つての憂鬱症昏迷
等を、その誘動原因として擧げる事が出来る云ふ。

精神病院の火事

精神病院の火事！

聞いただけでも凄惨そのものである。狂へる人に燃え上る紅蓮の炎、正に阿鼻叫喚の焦熱地獄。

亡父も私も火の用心には特に頭をつかつた。

従つて木枯らしの吹く三冬は、最も私の神経をイラ／＼させるのであつた。勿論看護人や火

の番は、交替で終夜構内を警戒して居る。併しそれだけでは安心が出来ぬ。霜氷る冬の夜の十二時過ぎに建物の周囲を見廻はつて、火氣に氣を付けたのも幾度であつたらう。獨り私ばかりではない。家族全體が、此事に頭を捕へられるのであつた。風が吹く。病院は大丈夫だらうか。かうして冬の夜をおちおちねむり兼ねる私達であつた。

私が病院を東京醫學專門學校に譲渡したのは、昭和二年の十月であつた。私の經營をはなれてから、ちやうど三年目の昭和四年二月十六日午後十一時、男子部病棟第三部から發火、病棟約八百坪を焼失し、火の手は更に隣接の陸軍砲工學校に及び、講堂約三百坪の外に、物理學教室と倉庫とを背め盡くし、午前一時鎮火、その損害約五十萬圓と傳へられた。そして焼跡から患者焼死體十一を發見した。(東京朝日新聞に據る)

亡父と私と二代、二十九年間に、火災の點では、あらゆる注意と警戒とを拂つて來た病院も私の手をはなれてタツタ三年目に、一朝にして灰燼に歸した。その朝、新聞を手にした私は、感慨無量、膏然として言ふ處を知らなかつた。

事の序に精神病院火災史を書いて見ると、

第一は、明治二十六年五月三十日に焼失した大阪精神病院（大阪市南区逢坂上ノ町四千九百五十三番地、醫師山本洪軸經營）である。入院患者五十二名のうち、一名の負傷者もなかつた。

第二は、明治三十一年十月に焼失した加藤癲癩病院（東京市本郷區田町二十八番地、醫師加藤照業經營）である。患者六名の焼死者を出した。

加藤は越前の人、彼が身を村閭の使丁に起し、本郷田町に癲癩病院を設立したのは明治八年の事であつた。爾來田町氣狂ひ病院の名は天下に喧しく、幾多の患者に福音を與へた。是よりさき加藤は、明治二十五年十月に、東京府北豊島郡高田村に、一萬五千坪の地所を獲て、患者千五百名を收容する大精神病院を建設せんと企てたが、その事成らざるうちに、祝融氏の災にかゝつたのである。その年十二月五日、加藤は患者焼失の責を負つて廢院の擧に出でた。當時世人が加藤におくつた言葉は「果斷」、「剛勇」、「義氣ある畏敬すべき人格」等々であつた。

第三は、明治三十五年四月十一日に焼失した船岡精神病院（京都府愛宕郡大宮村、醫師旭恭齋、池田正之助經營）である。患者十七名の焼死者を出した。

第四は、明治四十年九月に焼失した岩倉病院（京都府愛宕郡岩倉村）である。

第五は、大正六年二月二十日に焼失した府立大阪病院である。

第六は、大正九年一月二十日の東京府立松澤病院（東京府荏原郡松澤村、今の東京市世田谷區上北澤町三丁目千四十八番地、院長醫學博士吳秀三）の一部焼失である。原因は漏電であつた。

第七は、大正十二年十二月二十八日に焼失した王子腦病院（東京府北豊島郡瀧野川町西ヶ原八百八十九番地、院長醫學博士小峰茂之經營）である。

王子腦病院は、東京府代用精神病院に指定せられ、當時患者二百八十一名を收容した。此火災の起るに及んで、六十五名の逃走患者と、一名の焼死患者を出した。

警視廳は患者のうち公費患者だけを、府立松澤病院、戸山腦病院、加命堂腦病院、青山腦病